



婦人と子ども

第三卷第八號

# 謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歓迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざること。
- 一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

發行	毎月一回五日發行○第一卷第一號明治卅四年一月二十日發行
定價	一冊金拾錢○六冊前金五拾七錢○拾貳冊前金壹圓拾錢○郵稅各一冊一錢○切手代用は壹圓増但壹錢切手に限る。
入會者	は會則御承知の上にて東京女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會あて申し込まれば雜誌は無代價にて送呈すべし
購讀者	は總べて前金にて東京日本橋區本石町三丁目二十三番地金昌堂へ御注文のこと○送金は神田今川橋又は日本橋區町郵便取扱所受取入金昌堂あてのこと○見本は切手二錢に限り十二枚封入にて申し越されたし○前金相切候節は亦にて●印は御姓名の上へ附し早送御送附下されたたく御入用なき時は御斷り下されたく候○轉居の節は新舊共に御通知を乞ふ
編輯	に關する御照會及原稿御寄贈はすべてフレーベル會あてのこと
廣告料	一頁拾圓。半頁五圓

明治三十六年八月二日印刷  
同 年八月五日發行

不許複製

發行兼編輯者 東京市本郷區元町二丁目六十六番地 芳地  
 印刷者 東京市神田區錦町一丁目十九番地 計地  
 印刷所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地 熊田活版所  
 發行所 女子高等師範學校附屬幼稚園内  
 發賣所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地 昌堂

大賣捌所 東京 東京堂 ● 同東海倍文合資會社 ● 同北隆館

傳染病研究所長醫學博士北里柴三郎閣  
傳染病研究所部長醫學士柴山五郎作著

# 最近之肺結核療法

第三版發行  
菊版全壹冊  
正價金八拾錢  
郵税金八錢

## 次 目

●第一篇衛生食餌療法○緒言○營養療法○食慾不振○牛乳療法○營養製品○飽食療法○乳清及葡萄酒療法○アルコホール○空氣療法○強練法○運動及橫臥法○呼吸療法○精神の使用○住家衛生○療養所○療養所の選擇○海濱療養所○航海○內地療養所○高山療養所○醫の監督及病院療養○療養の時日○第二篇特異療法○化學劑○細菌產生物○結核治療血清●第三篇理學的療法●第四篇外科的療法●第五篇對症療法○熱○盜汗咳嗽及咯痰○咯血○疼痛○呼吸困難○心機衰弱○不眠症○消化障害○貧血○喉頭疾患○諸他の注意比較的治療に於ける注意

從來死癩と認められたる肺癆も今や一定の度に於て正當の治療を施せば全治若くは病氣を中絶し得べきを確定せり本書は即ち之れに關する最近の正當なる治療法を記述したるものにて衛生食餌療法に於ては各氣候空氣運動其他療養所に關する諸般の注意を述べ特異療法に於ては諸種の藥物細菌產生物血清等に關し對症療法に於ては各症候に對して施すべき正當の方法と理由とを述べたり結核の治療は醫家と患者との協力の協力を以て始めて其目的を達し得る者なれば醫家は本書によりて患者に示すべき方針と理由とを得て患者の信用を大にし患者は本書によりて醫者の命令の理由を會得して之に服從し以て治療の目的を達し得ん本書買切れの爲め久敷御眷顧に背きしが今や三版成る購讀を賜へ

產科婦人科楠田院長 楠田謙藏先生閱並序 產科婦人科專門醫渡邊光次先生著

## 拾壹版

# 普通妊娠論

附り妊攝の婦生

續編 小兒養育法  
紙數二百五十頁石版精圖四十個入  
懷中美裝 正價金六十錢 密封小包送十錢  
一名『兒を設くる法』

本書は久しく產科婦人科に従事して經驗に富める專門醫渡邊先生の著にして生殖器の解剖、生理、衛生を始めとして生殖に影響する全身の疾病、婚姻並婚姻後の注意妊娠並妊娠後の攝生に至る迄廿三章、百廿項を設け悉く網羅して平易簡明に説述し加之精巧なる石版畫數十葉を挿入し振假名を附せられたれば苟も自己の健康に注意し系統強健の子孫を得んと欲する諸君は男女を問はず必ず一讀せざる可らざるの好著述なりを蕃殖し強健の子孫を得んと欲する諸君は男女を問はず必ず一讀せざる可らざるの好著述なりを熟し不妊なりし婦人は可憐の兒を擧ぐることを得ん大方の諸君乞ふ世にありふれたる此種の述と同一視する幸を慮せらる可し

## 發兌元

神田區今川橋通  
鍛冶町四番地

電話本局(九四九)

## 誠之堂書店

●賣捌全國有名書店

原隆國著 藤岡作太郎先生校訂

# 編五 今昔物語選

蝶夢作 幸田露伴先生校訂  
編一 芭蕉翁繪詞傳附句集

# 袖珍名

近松作 饗庭篁村先生校訂  
編二 近松淨瑠璃  
種三

石川新望作關根正直先生校訂

# 編六 近江縣物語

秋成作 芳賀矢一先生校訂  
編三 雨月物語

# 著文庫

曲山人補 尾崎紅葉先生校訂  
編四 小三娘  
編五 金五郎

狂言記選 芳賀矢一先生校訂

# 編七 狂言二十番

東田京神 富山房 保裏町神

●全百部每冊編紙數約二百頁每編正一價錢●六冊壹圓四十錢●二十冊二圓二錢●廿五冊四圓十六錢●十五冊九圓●百冊七十圓●上製一冊付金八錢●增稅一冊金四錢●十五錢

# 富山房

東京神田區保裏町  
電話本局〇三六番

發兌元

食物と衛生とは最も密接なる關係を有す  
本書の出づる、蓋し亦時を得たるもの也。

櫻井玉子著 女史

# 家庭料理法

兩書共大好評再版

全一冊定價金三十五錢郵稅八錢  
全一冊定價金三十五錢郵稅八錢

# 衛生一多話

時下炎暑に向ふ、傳染病漸く流行せんとす、衛生を重んずる者は先づ本書を讀め!!!

東京鐘ヶ淵病院院長 橋本善次郎先生著

婦人と子ども 第參卷第八號目次

子ども

蹶鼠と兎との競争

あるぶす越

いそつぶ物語

一口ばなし

簡易英語

家庭

賢母たるの要素

玩具につきて

今昔いろは料理

學術

奇妙な動植物

史傳

賢婦郭氏の傳

文苑

夏月涼

竹柏會同人

擊水

まつ子

石井泰次郎

田寺寛二

杉山文悟

杉山文悟

杉山文悟

杉山文悟

竹柏會同人

月下のピアノ.....東くめ子

ひと本野菊.....つねを

瀧.....瀧子

慕まうで.....愛子

遊戯の方針.....町田則文

林

雜錄

江馬細香女史の詩.....小林雨峰

兵隊ごっこ.....和歌子

幼稚園の遊嬉.....女子高等師範學校附屬幼稚園

忘れな草の由來.....東牧羊

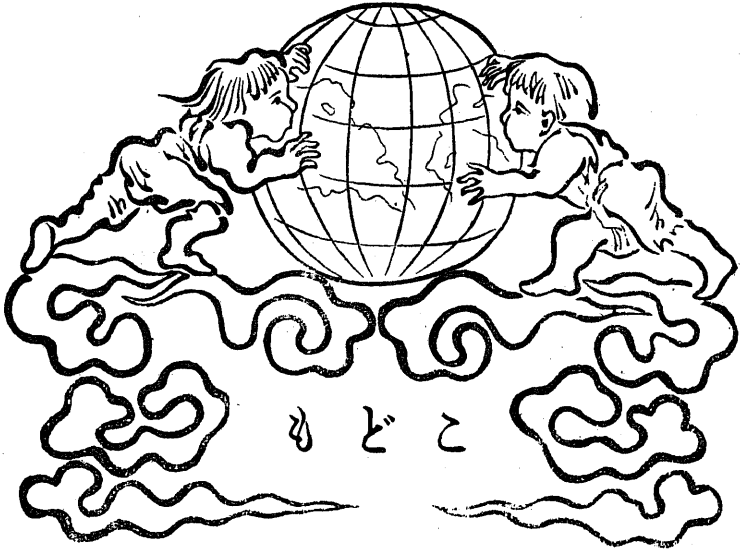
樹蔭の獨語.....夏山みどり

編輯局より.....編輯員

彙報

女子高等師範學校●府第一高等女學校●東京音樂學校●東京女藝學校●婦人制茶會●運動場公開の建議●市内公園の運動器械●對男子反情婦人會●傳染病媒介者としての蚊●兵庫通信●新刊紹介●會報

もど子と人婦  
號ハ第卷參第



鼯鼠と兎との競走

やまとの翁

天氣のよいある夏の朝お  
 日さんは、今やつと向ふの  
 山の間のとこに、顔をだし  
 かゝって居て、一面に露を  
 あびた縁の木の葉の間から  
 涼しいく朝の風が、すー  
 っと吹いてきて、畑の稲の  
 上を一息に通りすぎると、

ざーつと音がして、畑中緑の波をうち始める。

あんまり、心地のいゝ朝なので、平素は、お日さんの前ではろくに目の見ぬ鼯鼠までが、久しぶりで朝の運動をやつて見やうと思つて、のこくと一人で、でかけました。

さて、ぼつくと歩いて行くと、キャベツの畑があつて、その側に、こんもりとした、小さな、やぶがありました。その中に、一匹の兎が、うとくと朝寝をして居りました。

鼯鼠は、一體丁寧な動物ですから、兎の前を通りながら「兎さん お早う」といって お辭儀しました。其聲に兎は ひよいと目を醒ましたか、これは又 至つて高慢な性質ですから 折角 鼯鼠がお辭儀をしたのは、夫に挨拶もしないで置

いて、さも輕蔑した調子で、鼯鼠に話しかけました。

『やー鼯鼠君か、何だって、又、ろくく目も見えない癖に、こんな疾うから出かけたのだ？』

すると、鼯鼠の方は、音なしに『なーに、ちよいと朝の散歩をしやうと思つて』

といひますと、兎は又、

『散歩だって！生意氣じゃないか、そんな短い足をして、なにか他に足の使ひ道がありそーなもんだに』

こーいはれましたので、さすがの鼯鼠も、ぐっと癢にさわりました、一體鼯鼠は、うまれつき、人から比べると、大變に脚が短いので、夫も決して自分の故でないもんですから、いつでも



脚あしの事ことでからかはれるのが、一番ばん疝癢かんじやうなのです。夫おれでも、じっ

と 我慢まんまをして、兎うさぎに申ましますには

『だって、兎うさぎさん そんなに自慢じまんするもんじゃないやありませんよ、  
夫おれじや、君あなたの足あしで、何なにが出来できるんです？

『そんな事ことは、君あなたの知しった事ことじやない

と兎うさぎは答こたへました。そこで、鼯鼠むぎねは、

『それでは、一番ばん君あなたと競走かけっこをして見みませう、そんなに輕蔑けいべつした  
って、僕ぼくは決けつして負まけない積つりです  
すると兎うさぎは、腹はらを抱かかへて笑わひ出だしました。

『ハッハッハッ、ハッ、ハッ、こりや可笑おかしいハッハッハッハッ、ハッ、ハッ、ハッ、  
、そんな短みだかい足あしをして、ハッハッハッ、ハッ、ハッ、可笑おかしくって

堪らないじゃないか……けども やらうといふなら、僕だって

反対はしないさ。但し 賞品は何にする？

『さよーさ、金のメタルに、キヤベツ一籠としませう』

と鼯鼠が答へました、すると兎は

『よし、じゃあ、すぐ始めよう！』

『ちよつと待って下さい、僕は今から家へ歸つて支度をしてくるから、なめに、半時間もかゝらずに、歸つてきますよ』

といつて、鼯鼠は、急いで家へ歸つて行く、兎は一人で面白がつて待って居ります。

鼯鼠は、道々考へもつて行きました。『あの兎といふ奴は、全體高慢で仕様がな、併し、其割合に智慧がないのだ、夫で競

六  
 事をしたら、あの長い足で、すぐ己を追ひ越すと思てるに違ないが……待てよ、何でも、計略で一番勝てやらなければならぬ。

夫から、家へ歸つて見ると、鼯鼠の女房さんが、一人で勝手の事をやって居ったから、いきなり

『さー、今からすぐ己と同じ風をして一所に畑へ行くのだ、さー急いだく』

と、丸で氣狂の様になって、噪ぎ立てるので、お女房さんは吃驚して

『なんですかねー、あなた、そんなに噪いでさ、一体どーしたのです

『なにに、今ね、畑で兎と競争の約束してきたのだから、お前も行って、一つ審判官になって貰はねばならぬのだ』  
お女房さんは、之を聞いて目を圓くして

『まー、あなた、馬鹿なことにも程がありますよ、兎さんと競争なんて、どうしたって、叶ふもんですか、眞實に、あなた、餘ほど、どうかして居るよ』

すると、鼯鼠君は澄まし込んで

『黙って居らっしゃい、細工は、りうく仕上げをござらうじたお前たちにや分らないさ、黙って早く仕度をしなさい』  
仕方がないから、お女房さんも、早速、仕度をして、且那に付いて行きますと、途中で、鼯鼠君が、そつとお女房さんに、計

略を授けました。其計略といふのは、

先づ鼯鼠の夫婦は、どっちもよく似て居て、一寸見分けが附かない上に、二人とも同じ風をして居るのだから、尙更、どっちがどちらだか分りません。そこで、競走場へ行つてから、夫婦が決勝點の場所と、出發點の場所と、兩方に別れて居て、先づ、一二三の合圖で、兎と鼯鼠君と一所に驅げ出すと、兎が一飛びに決勝點へかけ付ける、すると、そこに、前程から待つて居たお女房さんが出て来て、もう さつきから来て待つて居るといって驚かしてやらうといふのであります。

さて、計略も出來たので、二人で、其手筈をして、競走場へ行くと兎は、先刻からチャーンと待ち構へて居ますから、鼯鼠と

兎とは、一所に并んで用意をします。

「鼯鼠君　いゝかね？」

「大丈夫！」

「ちやー　一……二……三

といふや否や、兎は丸で風の様な早さで、野原を走って行きま  
す、鼯鼠は、落ち付き拂って　やつと　二歩か、三歩か行つた  
と思ふと、すぐ自分の場所に戻つて来て　休んで居りました。  
兎は、そーとは知りませんから、一生懸命にかけ出して、すぐ  
決勝点と定めた松の木へ走りつきました。所が驚いた、いつの  
まにか、ちやんと、鼯鼠がついて居て

「僕は　もーさっ　きから来て居ますよ」



木谷

といて居る。これは、鼯鼠の計略なんで、實は、鼯鼠のおかみさんなのですが、兎は夫と知らないもんですから、すっかり、たまげて仕舞て、

「オヤ、こりやいけないぞ」

と思ひましたが、今度こそはと思つて

「じゃー鼯鼠君、も一度、よしか 一二三」

といつて、その松の木から、もとの所へ向けてかけ出しました。お女房さんは、又後へ戻つて、松の木に隠れました。

一生懸命に駆けつけてきて、元の所へ来て見ると、又驚いた何時の間にか、ちやーんと、鼯鼠君が待つて居て

「僕は、もーさつきつきましたよ」



といつて澄して居る、

「オヤ 又か」

と思つたが 今度は もー兎もヤケ氣味になつて

「鼯鼠君、夫じやもー一度やるか」

と言ひ出しました

「何度でも僕の方は構はないから」

と言つて 鼯鼠君は、どこまでも丁寧です

それから、兎は 驅けつたり 戻つたりして、都合、みんな

七十三回ほど走りました。けれども、其たんびに、いつも鼯鼠

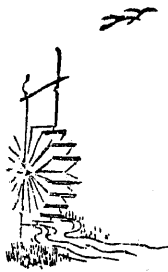
が勝利を得ました、

とーぐ 七十四回目になつて、兎は もー全く疲れて仕舞たと

見えて、途中で倒れたなり、暫くは起き上ることも出来なくなりました。

そこで、鼯鼠は甘く計略が當つて高慢な兎を負かしたから約束の金のメタルと、キヤベツ一籠とを取つて、夫婦連れで、ゆるく家へ戻りましたとさ

めでたしく



あるぶす越

輜越の阪落しといふと、日本の歴史の話の中で、随分名高いものですが、然し其阪落しの爲めに、義經の軍勢が何百人死んだといふこともない様で、おまけに彼の強力無双の畠山重忠などは、自分の馬を背負た儘で、その難所を越したといふことです。奈翁のゐるぶす越といふと、世界の戦争中の最も有名な話で、なか／＼輜越などの類でなかつたといふことです。簡単に其お話をしてみませう。

あるぶす山といふのは、歐羅巴中で一番高い山でして、富士山よりかも、ざつと三千尺も高い、だから年中、雪や氷で埋まつて居ます。此山は、佛蘭西の東南にあつて丁度、伊太利と佛蘭西とを界

して居るのです。

そこで、奈波列翁のお話は、諸君がもはや御存じのことゝしまして、すぐあるぶす越のことをお話します。

さて奈波列翁が、歐羅巴の方々の國を征伐して、今度はお隣りの伊太利を攻めかゝりましたが、夫にしてはどうしても、此高山を越さんければならぬ所から、千八百年の五月といふ頃に自分で軍勢を引き連れて、不意に此山を越えました、夫から四五ヶ月も経つてから、自分の方の大將に、マクドナルド將軍といふのがゐる、其將軍に命令を下して、兵一万五千人を引きつれてあるぶすを越えて、伊太利の平野で自分に出會へと傳へました。

時は此年の暮の十二月の始め、十一月の終の頃で平地ですら、も一雪で眞白く被はれて居るに、ま



して、年中雪の消えないこの高山を越すことは、非常な冒険であります。けれども、何しろ命令ですから仕方がない、途中雪の爲めに皆が埋つて死ぬにしても命令には従はねばなりません。そこで一万五千の兵どもは、マクドナルド將軍に指揮せられて、此最も危険な行軍を始めました、屏風の様な、断岩絶壁をよちて、高い〜六千尺の峰を越えかゝりました。

そこで、先づ行軍の隊列を申しますと、真前には嚮導といつて、道を案内する者どもが、手ん手に長い黒い竿を持つて、夫を眞白な雪の中に打ち振り打ち振

夫を眞白な雪の中

りして道を教えて行くと次には工兵だの人足だの  
が氷だの雪の塊を取り除けては道路を造つて行、  
其次には、騎兵が馬に乗つて……夫も普通の馬で  
は行かない、一番強い逞しい馬に乗つて、雪路を  
踏み平して進む、その後には續いて、軍隊の大部分  
が進軍して行きます、夫から大砲も、平地ですと、  
馬に引かせて行けば、何でもないが、こゝではそ  
うは行きませんらか、粗末な橋へ乗せて大勢で押  
したり引いたりして行く、尤も道のよい所は牛な  
どに引かせました。

一羽の鳥も飛ばない、一匹の獣も驅けない、まし  
て人などの往來は愚なこと、雪はいやが上にも降  
り重なつて一寸の前も見えない、天も地も暗々蒙  
々たる此山道を一万五千の兵どもは、ひた進みに  
進んで行く、時々アルプス下しの吹雪が、さーつ

と来ると全軍の眼はくらんで一歩も行けない、ま  
してつき通す様な寒さで手が凍る足が腫れる、其  
難澁は中々一通りや二通りのことでない。

この様にして、大方半分も上りついた頃でした。  
不意に煙の間から、ゴーツといふ響が聞こえたの  
で、眞つ前に立つた嚮導は「スハ大變」といふの  
で眞着になつて互に顔を見合はせました、驚いた  
のも道理、かの響はだん／＼高くなつて来ると思  
うと嚮導どもは、一生懸命の聲で「雪崩だ！雪崩だ  
！」と叫びました。が、叫ぶが早いか、ガラガラ／＼  
ガラツといふ響と共に山の様な氷と雪との塊が、  
頭の上から非常な勢で崩れ落ちて来て、ズドーン  
と行軍の列の眞中にかぶさつたので、三十騎の騎  
兵は、立ち所に拭い去られた。馬と乗手との黒い形  
が、白い雪の中でもがいて居つたのは、ほんの暫く

で、夫もすぐと見えなくなつて仕舞ひました。

全軍は此有様に、全く避易しました、吹雪の真中に躡踞つた儘で、寒さと恐ろしさで慄えて居る今の處では、目さす敵は肉と血とでなくつて、寧ろ此猛然たる吹雪であります、此敵に向つては剣も銃鎗も何の役にも立たない、然しながら、此際退却背進なども全く望がありません、何故かといふに周圍八方十重二十重に雪で圍まれて居るから。そこで、何でも進軍せねばならない、でないといふ死ぬるに決つて居る、生き様と思つたら無闇と進みより外にない、此時、マグトナルド將軍は、馬上より大聲で、叱咤した「全軍の兵士、汝等は今伊太利から招集せられたのだ、將軍は汝等の到着を待つて居る、進んで一舉に敗れ先づ此山と此雪とを、次いで伊國の平野と敵軍とを」

全軍此に焚かれて、再び進んだ、眼は吹雪に閉ぢられ手足は寒さに凍えて、其上休む所もなしに、マグトナルドは進軍を續けました、其危険なこととは殆んど譬へるに物もない、時としては一隊の兵卒が悉皆雪にさらはれてしまつた事もあつた、其中でも、殊に憫れなのは、次の咄しです、夫は一人の鼓手が、辛うじて雪崩れの中から、這ひ出したと見えて、切りに太鼓を打つて助けを求めて居る様です、包まれた様な幽かな太鼓の音が、遙か谷底の雪中から聞える、兵卒どもは、夫と知つたが、誰も助けに行くことができない、一時間許りは、太鼓の音が忙がしく聞えて居る、其中にだん／＼弱つて行つて、遂には全く聞こえなくなりました。さて、此危険な進軍は、二週間續けられました。二百人の兵隊は、此間に雪の爲に斃れました。

このあるぶす越は、奈波烈翁の戦争の歴史の中で最も名高い一でありまして、所謂精神一到何事不成といふ格言を、よく顯はした實例であります。

いそつぶ物語

其二十七 農夫と鶴

農夫が、畑を造つて種をまくと、いつでも大勢の鶴がかたまつてやつてきて、畑を荒らして行きますから、或日網を張つて一度に、澤山な鶴をいけどりました、所が其中に一羽の鶴が居て、一本の脚を網で折られてつかまりましたが、一生懸命に命乞をします。

「御主人様、どうか助けて下さい、此通り私の脚は一本折れて居ます、可愛相じやありませんか、おまけに私は鶴じやありません、鶴と申して、實

は性質の立派な鳥です、卿、私がどれ程両親に孝行だかといふことも御存じでせう。虚とお思ひなら、一寸私の羽をむらんださい、鶴などは大變な違じやありませんか」

そうすると、農夫は大きな口を開いて笑ひ出した。

『なる程、お前のいふのは皆尤もな話だ、然し己はそんなことは知らない、たい鶴といふ盗人どもと一所にお前をいけどつたのだから、お前を鶴と一所に殺す丈のことだ』  
といつてとうとう殺して仕舞ひました、「羽のある鳥は何時も一所に群れて居ます」

其二十八 山から鼠

何時でしたか、どこかの山が大變に荒れ出して、あちこちに其響き聲が聞こえたので、何事かと思

つて大勢の人々が方々から集つて来て、誰も彼も心配さうな顔附で、何れ大變な災害でもある事だと待ちかまへて居ると、豈計らんや、一匹の鼠が這ひ出して來ましたとさ。

「何でもない事に大騒ぎをするものでない」

### 其二十九 熊と狐

ある時熊が、自分が大變な仁者だといつて自慢しました「何だつて、一切の獸類の中で、人間に取つては、乃公ほどやさしい者はない、乃公は死んだ人間にさへ口を觸れないからなあ」すると狐が側で聞いて居て、にこ／＼しながら熊に申しますには、「ハ、ハ、ハ、一體ならば、生きた人間を食はないで死んだのを食ふといゝのだ」

### 其三十 龜と鷺

或時に、一匹の龜が「さもだる相に脊中を日には

しながら、水鳥に向つて、誰も己に飛び方を教へてくれる人がないと言つて、大變に自分の不幸な境遇をこぼしました。すると一羽の鷺が側にやつて来て、つく／＼と龜の悲を聞いて居ましたが、やがて、若し龜をつかんで行つて、高く空中を飛び廻はつてやつたら、褒美に何を呉れるかと聞きました。そこで龜が申しますには、「そうして呉れば、僕は海の中の一切の財産を上げる」として、鷺は「じゃー、僕が飛び方を教へてやる」といつて、すぐ、爪にひつかけて、大方雲の中までも飛んで行きましたが、やがて、いきなり爪を離すと可愛相に龜は、高い峻い山の上に落ちて、甲も何もぐた／＼に碎けました、死ぬる間際になつて、龜は次の様に申しました、「嗚呼、僕がこんな目に遭ふのは當然だ、一體地面の上で、やつと歩き廻



はることの出来る僕の身に取つて、羽だの雲だのがあつた所でどうなるもんか」

「もし人間も、自分の望みを皆遂げると、屢々、滅亡しなければなるまい」

一口ばなし

牛乳と牛肉

牛乳は飲むが、牛肉は食へないといふ人に向つて何故だといつて聞いたら、其人の云ふには、

親の乳を飲んでも、親の肉は食ふに忍びぬと同じことだ。

かみなりおこし

常陸山と梅が谷と連れ立つて、或村を通つて居つた所が、俄に雷が落ちて、そこいらの電信柱をうち倒したから、二人の大關がよつて、一生懸命に

起さうとしたが、どうしても起されない、そこへ一人の小さな職人体の男が来て、譯もなく起したので、不思議に思つて、何者だと聞いたら私がかみなりおこしの職人ですと答へました

簡易英語

(1) Water 水 (2) Grass ガラスのグラス

Bring me a glass of water.

水を一杯持つて来て頂戴

Bring me an ink and pen.

インキとペンとを持つて来て頂戴

# 家庭



## 賢母たるの要素

最近數年の間に於て、我國の女子教育の進歩發達した事は、總べての出來事の中で最も著しい事實である、従つて女子教育の機關として、女學校の増設せられた事も最も顯著な事實で、殊に東京に於て吾人は其最も著るしき事を感じる、而してこれ等の女學校の標榜する所は、何れも皆良妻賢母を養成するを以て目的とすといふに在る。

然しながら、徐ろに熟察して見ると、其所謂良

妻賢母といふ語の意義が、甚だ曖昧であると思ふ詳細にいふと、人によりて良妻賢母といふ語の解釋が違ひはしまいか、どういふのが良妻であるかどうかといふのが賢母であるかといへば、各人の考ふる所は必らずしも常に一致しないではあるまいかある人は、かくくのが良妻だといひ、ある人はしかくくのが賢母だと考へる。して見ると、所謂良妻賢母といつても、たゞ其名目だけでは分らぬまして現今の様な、家庭に關する新舊思想が、明に二の潮流をなして居る時代には、尙更其内容意義を明示する必要があると思ふ。

吾人は茲で、敢てこの問題を解釋しようと思ふのではない、賢母とは果して如何なる資格を有するものをいふか、良妻とは果して如何の教育を受けたものをいふかを決定しようとするのではない

い、然しながら例令夫等の意義内容を如何様に解釋するにしても、夫等の資格をどう決定するにしても所謂賢母良妻といふ語の中には到底缺くべからざる一の要素といふものがあつて、然も世人は此要素を見ることが、他の資格意義等に關して大に冷淡ではあるまいかと、思ふのである。

近頃東京の某新聞紙に、當世百人娘といふ題の下に、日々都下の令嬢の肖像、性質等を掲載して居る。其の多數は大低高等女學校程度の卒業生で従つて良家の妙齡の少女である。吾人は、果してどういふ目的で、此記事が續けられつゝあるかを詳にしないが、其記載して居る節は、殆んど同一筆法で、曰く、性質順良快活、曰く琴曲は其奥義を得たり、曰く生花は其妙を極む、曰く最も書畫は堪能なり、曰く茶道は何某に就いて、割烹は

何某を師として何れも一通りの嗜みあり、曰く何曰く何、其よく百般の諸藝に亘りて堪能を得て居るのには、一に驚く外はないが、然かも妙齡の處女として、將來の良妻賢母として、所謂吾人の望む所の一要素に付いては、一人として記載せられて居ないのである。其一要素とは何か、曰く育児の術である。

育児といふ事は、婦人に取りては固より唯一の務ではない、然し一般の婦人に取りては、殆んど必然の義務である、結婚をして圓滿なる家庭を作り、子を生みて之を立派に育て上げ、以て社會の有力なる一員として之を國家に貢獻するといふことは、よし婦人たるもの、唯一の務でないにしたら所が、多數の婦人に取りては最も大なる、最も必然の義務だと思ふ。吾人は良妻といひ、賢母とい

ふものを例令如何様に解釋しても、此大なる義務を果すに必要な育児の方法に曉通して居るといふことは決して缺くことが出来ない一要素であると思ふ。

吾人は琴曲とか、茶道とか、生花とか、和歌とかの如きが、婦人の高尚優美な性格にどれ程の影響を興へるものであるか、若くは結婚前に於て、何を捨てゝも是非とも之等に通曉して置かねば、將來家庭を作る上に於て、果してどれ程の不都合が生ずるだらうかといふ様なことに付きては、こゝで詳論する邊を得ない。然れども、一朝育児の知識を缺いて居つては、妻としてはた母として、自己の家庭の爲めはた國家のためどれ程の不幸を醸すかも計られないことは断々として明言し得るのである。ある人は「總領のじんろく」といふ諺

に通俗の解釋を興へて、總領は結婚した婦人が育児の智識も経験もない折に出来た子だから、大抵は馬鹿になるのだといふことを顯はしたのだといつた。はた又、人間の死亡の數は生後一年の間に最も多いといふのであるが、夫が又長子に多いか次子に多いかを調べたならば、必ずず其死亡は、長子に多からうと思ふ、これ亦母たる者の育児の心得がない事が確に其主なる一原因をなすのに違ない。

かく考へて見ると、將來人の妻となり、人の母となるに必要な資格は、勿論他にも種々あるであらうけれども育児の心得を十分に得ておくことは極めて必要なる一要素をなすことは、最明である。然るに、現今、妙齡の婦人令嬢にして比較的輕んずべき他の諸藝術に力を専らにしながら、此

要素に向つては殆んど注意を拂はないし、世間も亦格別之を不思議がらないといふことは、實に怪しむべき限である、勿論古來育兒の事といふものは、大低母となつてから、殆んど本能的に、殆んど無意識的にやつて行つて居ることは事實である然しながら子供を育てるに、どうすれば其精神なり其身體なりに悪影響を與ふるか、若しくは良感化を及ぼすかなど云ふことを十分に意識しないでたゞ無意識的に、たゞ本能的にやつて行くといふでは、それは全く偶然的の動作であつて、實に不安心とも危険とも譬へ様のないといふことは、前既に述べた所で分る。

嘗て、マールンホルツ、ビュロー夫人が次の如くに言つたことがある、「女子の教科として亞弗利加内地の記事だとか、極東亞細亞の氣候などは、

母の責務たる育兒の課目をさし置いてまでも教へなければならぬ必要があるであらうか」と吾人は今日、育兒のことをさし置いて、幾多の時間と能力と金とを、前述べた様な諸藝術に費消して願みない當世百人娘や、其親たちや、はた世間一般の人に向つて、謹んで此言葉を進呈し、併せて直接に良妻賢母の養成に従事せられる人々に向つても此點に向つて十分の注意を拂はれんことを希望する者である。

(翠水)

玩具に就きて

ま つ 子

幼稚園に於て弄ぶべき玩具即恩物は木板箸環豆細工剪纸或は織紙等の色々の種類があります、何も工夫力想像力に訴へなければなりません

ん、而して手指の發達せる後にあらざれば、趣味も起らず、興ふるも何の價値もありません。今最幼稚の時代即工夫想像力共に未發達せざる前に於て如何なる玩具を弄せしむるかといふに、形の供はりたるもの即工夫力も想像力も要せざるも眼に觸るゝや自然に幼兒の感官を刺撃し得るものであります。

是等の玩具の種類は澤山ありまして即人形、動物の模型器物其他デン／＼大鼓とかオシャブリ等であります、其中に於ても最初に悦ぶ者はオシャブリ次にデン／＼大鼓のときものであつて、それより次第に進みて人形とか動物の模型、或は汽車汽船のとき運轉するものを悦ぶに至り、人形とか動物に向つては同情をもち己の友達といふ感と起すに至ります、ことに音を發するものは非常

に喜びますから、其音は出來得る的不協音ならざることには注意しなければなりません、常に不協音に馴れてしまひますと、聽官の修養上大に妨となりません、故に玩具を興へますには大に注意をしなければなりません、一時に多くを興ふるといふ事は固よりよくない事でありますが、其他形、色、及質に於て大に注意を要します。

形は前にもいひし如く種々あれども、品性を害せざるものであつて、而して損傷し難く、而して又玩具の爲めに創傷を受くる様の危險なきものでなければなりません。

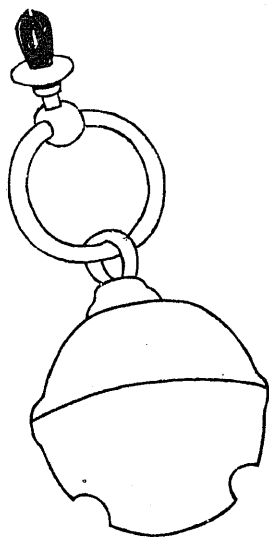
色も幼稚の時は鮮かなる色を好むものでありますけれども、好むからといふて色の性質をも考へず只美しきものを興ふるは、甚危險であると思ひます、色質の中殊に彼鮮かなる嗚乎美しいとか、

奇麗とか思ふて見る色には有害なるものが多くありまして、即ち砒素、鉛、亞鉛、銅等のときものをふくんで居ります、デン／＼大鼓のとき赤黄青などの中には砒素及銅をふくみ、鯛の玩具には鉛を含むことあり、何れも有害でありますから、可成色なきものを擇ぶに若くはありませぬ、されど無色のものは余り興味なき故、害なき色にて幼児の喜ぶ範圍に於て出來得る丈、高尚なる色を擇ばなければなりません。

玩具には紙細工あり、粘土細工あり、木細工あり、陶器あり、金屬製のものあり、護摸製のものあり、何れも得失があります、なかにも尤損し易く不經濟なるは紙にてつくりたる者であります之に反し軽くして持ち易く、破損し難きものは護摸製のものであります、けれども日本には此ゴム

製のものよき玩具は余りありません、若しゴム製で簡單にして形色共に害なき玩具が出來ましたならば漸く自分の手にて弄びて喜ぶ位の少々な子供などには猶更のこと甚善なものと思ひます。

左に掲げましたのは、此頃亞米利加よりまゐり



ましたゴム製の玩具であります、これに似寄りました

るものは日本にも御座いますけれどもこの様に色といひ形といひ如何にも圓滿によく、出来て居りますのはまだみあたりませんから、皆様に鳥渡御紹介致します、實にゴムの質がよろしくて幾度落しましてもなかく破損れません。

(イ)は 乳頭

(ロ)は ゴム製白色の輪

(ハ)は ゴム製にて下方は二個の孔あり中に鈴を入れたり、下部及環は桃色、頭部はウス青色

今昔いろは料理

石井泰次郎

金銭領蛋の拵方

此金銭領蛋は支那料理中に於て、最簡易なる者な

り、まづ鶏卵(實物は鵝蛋を用ふ)を一箇とりて二つにわりくづさぬ様に器に入るべし、小皿を用ふべし、さて真中に黄味有る様にして置き其皿のまゝ蒸籠に入れてむしあぐべし、さて全むし上りたるを、別に小碗に入れて清汁(實物は雞豚の汁なり)の代りに鯉煎汁を用ひて仕立て出すべし

キンピラ午莠拵方

午莠を能く洗ひて、長さ一寸五分ほどに切て、薄く壁に切目を打込みて、赤横にして細くせん切るべし、切水にてすすぎて、笹にあげ水氣を能く去るべし、鍋に胡麻の油、或は豚油を入れて煮ゆるちたるを見て午莠を入れるべし、よくかき交て煎て其上より酒醬油砂糖を加減し、又蕃椒を少し入れて煎あぐべし、器に盛りて上に白胡麻のいりたるをばらりと振掛てよし



○キンピラとは金平として極めてつよくたけき男を書きたる繪本に金平本の名あり、此事によりて此つくり方をキンピラと名付たるなり

さんちやく豆腐拵方

茄子の中心なるを、上部を切り、中をくりぬきて其中へ豆腐のすりたる油揚の細切、にんじんのせん切など白わへにしたるを入れて出すなり、

(ゆ)

ゆみそしちえかた 柚味噌拵方

柚子の大なるを枝をつけながら採取して、上部の枝を付たる上を一切さりと、中の身をきれいに抜出して、温湯にて洗ひて笹の上へのせあき、さて白味噌と赤味噌と等分に合せても、又赤みを少し合せてもよし、先味噌を搗盆にて能くすりて、馬尾篩にて裏漉して、柚の實をしほりて、其汁を

入れて、古酒にてゆるめて、鍋にて砂糖を味噌百々に五十匁ほど入れ、胡麻、摺生姜、又焼栗さざみ胡挑など入てかきませ、能々煉つめて、右の柚の内にに入れて、技つきをふたにして、焼なべの上にあぶら敷て入て、焼て出すべし

ゆりねりまけしちえかた 百合根煉酒拵方

百合根を水にて洗ひ、下の黒き所を去りて、鍋の湯に入れて、ゆにして、直ちに笹にあげ水を切て馬尾篩にて漉して、清酒にてのぶるなり

○湯煮したるを、細かさあみの上にて水氣を

あぶり取るもよし

ゆきなます 拵方

何の魚にても細くつくりて皿に盛り、上にかろしたる大根をかきて出すなり

(番外)

道明寺羹 どうめいじやかん

道明寺糲 一合 水一合五勺入フヤス

角 天 二本 水四合 入トカス

砂糖 二百五十匁以上(シホンビキ)

まづ道明寺糲を一合ちりを去り、器に入れて、水を

一合五勺計りて入るべし、木抄子にてかきまぜて

おくなり

つぎに白角天を水にて能く表面を洗ひて、水に浸

しおき、十分程おき取上て、水を能くしぼり、庖

丁刀にて極めてこまかに小口より切るべし

つぎに鍋に水を入れて(角天一本に二合の割合也)

炭火にかけ、其内へ右のきざみたるを入れて煮る

べし、煮えたつ時木抄子にてかきまぜて少しもか

たまりなさを見計るべし

つぎに砂糖を百五十匁計りておき、右の角天のこ

りなく溶解したるを見て、其中へ入るべし、入れ

て木抄子にて煉ること約十分間すべし、然れば砂

糖つまりて糸を引くやうになるなり、

つぎに右のつまりたるを、炭火より取れるして、

木抄子にてかきまぜながら冷すべし、約十分間た

えずかきまぜ居るべし

つぎに前の道明寺糲の器をよせねきて、右のさめ

たる汁を少しづゝ入れてかきあはすべし別器へ道

明寺少し砂糖汁をすこしと入れて、木抄子にて搗

まずれば殊によし、かくして皆あはせて、重箱な

どの中へ流し入るべし、時間二十分前にかたくな

るなり

つぎに取出す時は四方を庖丁刀にてすかしおきて

重箱をうらがへして打て出すべし



奇妙な動植物

虫を射て食ふ魚

在高崎 田寺寛二

前回に述べましたアン

コウはなかなか巧妙な

ことをやりますが、今

度はまだまだ奇妙不可

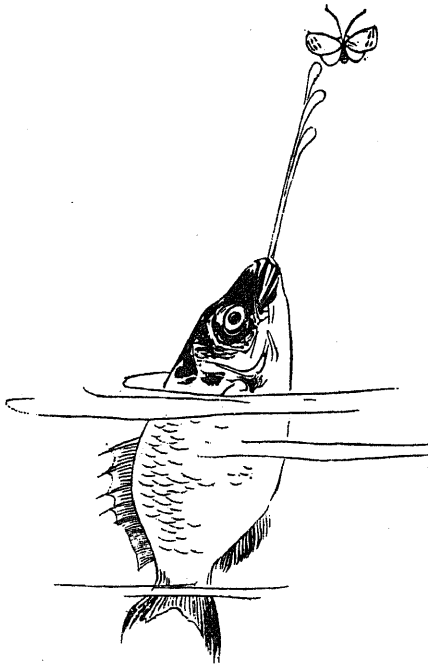
思議なことをする動物

を御照會しませう。

水盤の中に飼ふてゐる

金魚や鮎は少し時が經

ちますと、水の中にと



けてゐる空氣がなくなるものですから、こらゑき  
れなくなつて口を水面へ出して空氣を吸ひます。  
また池や沼の傍を通つてゐますときその水面に氣  
をつけてゐますと、鱒が時々下から上つてきまし  
て、空氣を一寸吸つて直ぐ下ることがあります。  
これなども一寸知らぬ人が見たら随分面白がるか

もしれませぬが、こ

ゝにまつとまつと面

ト小しろ

キさ白いことがあります

ソな

テをどういふことかと申

ス落

がさ

しますとトキンヲテ

かう

らし

水て

を居

てし

魚ですが、この魚は

常に水面に近い處を

泳いでゐます。もし小さな虫類が水際を飛んで居ますと、トキソヲテスは密つと頭を出しまして能くこの虫をねらひ自分の口から水を噴き出しまして、之を落して食ひます、その有様は丁度小さな水鐵砲を射る様です。

前にいひました、アンコウも此トキソヲテスも一寸考へると、人より勝れた手並を持つてゐる様ですが、こんな上手にやるのは、吾々の様に決して考へてやるのではなく、たゞ魚や虫をみると自然にかうなるのです。

斯ういふと甚だ變な様ですが、此が人間と違つた處で、此作用を動物の本能作用と申します。

赤兒の生れ乍らにして乳を吸ふのも、蟻が夏の時に力一ばい食物を其巢に集めるのも、燕が巧みに巢をかけるのも、蜘蛛が立派な網を張るのも、皆同

じことでそのもの自身には何も知らないで、唯無暗にやるのです。世の人は蟻を勤勉家で、中々遠くまで慮のあるものといつて、蜻蛉が夏の中だけ飛び廻つて、涼しくなりかゝると死ぬのにくらべて、善い誠にしますが、蟻は決して夏食物を集めて居いて、冬働けぬ時に食はうといふ様な、そんな賢いものではありません、夏本能で畜へた食物が、遇々冬になつて役にたつた位な事です。まだこの本能作用については、随分面白いこともありますが、まあ此れ又にして置いて、ちと流變りの鳥でも御目にかけてませう。

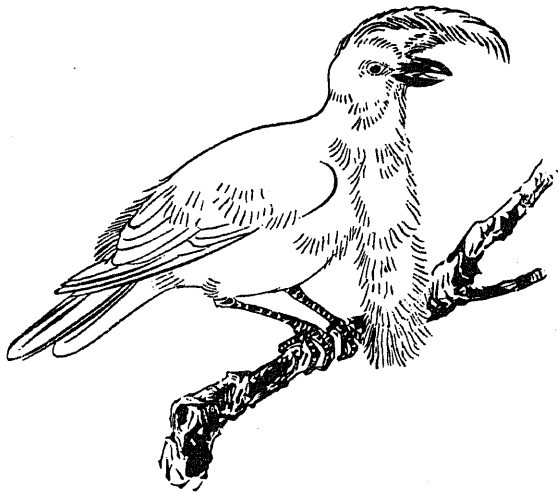
### 傘を持つて居る鳥

カサドリは南亞米利加に棲んでゐる鳥の様な鳥ですが、頭の上には美しい黒がかった、青色の而も艶のある羽毛が、球の様になつて頭を被ふてゐま

す。この冠は常にはさ程大きなものではありませぬが、怒つた時などは、孔雀七面鳥が羽をひろげたときのように羽を逆立てます。そのときにはその冠の直径は四寸二分位にも大きくなります。此冠は何の爲めにあるかと申しますと、鶏の雄のトサカ牡獅子のタテガミ牡鹿の角に同じ様に皆雄の裝飾なのです。尚ほ此鳥は圖にある様に其頸の處から胸の方へ細長い袋が下がつてゐます。

此袋の部分に生へて居る羽

毛は青色をしてゐまして、魚の鱗の様に覆瓦状



に曇みかゝつてゐます。此袋の効用は一方では一種の裝飾となり、また一

方では蛙が聲を出すときに頬の邊で膨れます袋の様に聲を大きくする機關なので或學者の研究によりますと、此袋の發達は氣管（咽喉から肺へ空氣が通入路）や、發聲器（聲の出る機械）などの生長と、一致して居るとの事です。

何故此袋が聲を大きくする作用があるかと申しますと

此鳥が鳴くときには此袋が斯様に美麗な冠美事な袋は

膨れますからです。

雄<sup>き</sup>はだけあつて雌<sup>めす</sup>には唯<sup>ただ</sup>其名<sup>そのな</sup>残<sup>のこ</sup>があるばかりで  
す。何<sup>なに</sup>故<sup>せ</sup>でせうか。



Hated is as blind as love.

嫉妬の盲目なるは戀愛と同じ。

# 史傳



拜啓この度婦人と子ともと申雜誌、御發行のよしにて、一部御寄贈下され、謝し幸り候、ついでには、右の材料にもがなと存候てこの程中、鹿洲全集より、譯しおき候賢婦傳を、御覽に入れ候併し漢文直譯ゆゑ、ぎくぐくとして讀み難かるべしと存候へ共もと鹿洲の文章ゆゑ、漢文流に自らの趣味あるものなことをくく意譯にするはこゝろよからぬまゝ、かくもものしたることに候。

次に、この賢婦傳は、わか明治の御婦人かたには、如何とも心附きたるふしぐも候へども、その心を守ることのかたきとこる、夫を助くる心はえのころなど、いと目出度存候。たゞ所かはれば品かはる、と云ふたとへの如く、その心をつくすむきぐくの、うげかはれぬふしあるは、彼れとわれと、よろづ習はせの異ればなり。それさえ汲みわけたまは、この傳もまた必ず教へ草となるべしと存候まゝ、一應の御斷りを、添えたる事に候  
願首

杉山文悟

賢婦郭氏の傳

郭氏は、字を真順と云ひ、潮陽の周伯玉の妻なり。

伯玉は名を瑤と云ひしが、字を以て行はれたり。

少にして讀書を好み元の至正年中、茂才異等に擧

げられたれども就かず、隱居して自ら樂めり。郭

氏と相敬すること、賓の如くなりしかば、時に海

濱の糞子と稱せられたり。郭は、幼にして聰慧な

りしかば、父、教諭して書を教ふるに、輒ち忘れ

ずして、經學に通し、旁ら子史百家に及びて、能

く詩を爲り、尤も古に長せり。人となり智識あり

て、善く當世の事を談論するに、胸中に了々たり。

片言もて斷決するも、謀に老けたる者と雖も、以

て過ぐるること無し。元末に、大に亂れて盜賊と

も盛起せしかば、伯玉に従ひて居る村樂にさけた

るに、寒の寒ら、方さに潛に嘯聚を思ひ、守望を

聯絡し、鄉村を保んずると云ふを以て名と爲し、

伯玉が、故より長者なるを聞き、群りて領袖に推

し、將に奉して以て衆事を主らしめんとせり。伯

玉、之を許し、歸りて郭氏に告げられたれば、郭の曰

く不可なり、寒中の諸少年は、方さに驍傑にして

自ら用ひ、其の氣は下す可からざれば、勢ひ皆人

の下と爲る能はず。而かるに、公が禍首となる

は、亦憚ならずや。夫れ能に矜り、智を銜ふもの

は敗れ、敵を輕んじて謀の寡きものは亡び、徳を

度り力を量らずして、衆に先んずるものは禍あり

外には智勇の名を負ひて、内には敗亡の實を收む

ることを、公は何爲ぞ一に此に至れるやと。伯玉

の曰く、吾れ已に之を許したれば、奈何んすべき

と。郭曰く、第だ病と稱して往くこと勿れ、請ふ

公の爲めに之を謝するを得んと。居ること數日に

して、衆、果して伯玉の所に詣りしに、伯玉は伴り臥して起きず、病を以て報じたれば、衆、頗る望む所を失へり。然れども、猶や、瘡ゆれば、即ち事を視るならんと思へり。郭氏、因て衽を斂りて再拜して、辭するに曰く、公等は伯玉の無能を知らずして、謬りて、重寄に推されしは、光榮己に極れり。篤劣にして堪えずと雖も、猶首を矯げ自ら奮つて、衆望を慰めんとせしに、不幸にも福の薄く災の生して、當さに疾の作るは、此れ天の伯玉に限る所以なり。願くは、公等よく熟々計りて賢者を立て、伯玉の爲めに猶豫して、事機を失ふことを致す勿れと。衆ら、其の言を然りとして遂に引き去り、別に主を求めて之を立てたり。未だ幾ばくならずして、意見の協はざるを以て、立つる所の者を殺し、自ら相雄長たりしかば、寨中

大に亂れて、隣賊の爲めに陥いられぬ。伯玉は幸にして難に罹らざりしかば、人威な郭氏の先見に服せりと云ふ。初め、寨中に農賈の儔多かりしゆを、相尙んで粟を積みしを、郭は獨、伯玉に勸めて之を分散して餘藏無く、日暮るれば索を縋ひしに、人其の意を諭るもの無かりしが、是に至り賊入りて盡く積聚する所を燔けり。伯玉は、繩を引いて妻子を繋ぎ併せて自ら縛して掠められしもの、如くせしかば、賊は以て意と爲さず、間に乘し脱して溪頭の寨居に至ることを得たり。明の太祖の天下を定むるや、指揮を愈良輔に命じて衆を帥いて南征せしむ。時に寨人は、尙未だ歸り附かざりしかば、愈は兵を以て至り、將に之を勦せんとせり。郭氏は、乃ち愈將軍を頌するの引一篇を作り、道を遮りて之を上れり。其の辭に



曰く、

將軍開國之武臣、

早攀鳳翼附龍鱗、

烟雲慘淡蔽九野、

半夜捧出扶桑論、

前年領兵下南粵、

眼底群雄盡流血、

馬蹄帶得淮河水、

灑向江南作晴雲、

潮陽僻在南海瀕、

十載不斷干戈塵、

客星移處万里外、

天子亦念還方民、

將軍功名邁前古、

五千健兒猛如虎、

輕裘暖帶蹈地來、

不減襄陽晉羊祜、

此時特奉聖主恩、

金印斗大龜龍紋、

大開藩衛制方面、

期以忠義酬明君、

宣威布德民大悅、

把菜一筮誰敢奪、

黃犢春耕万隴雲、

鼙鼙夜臥千秋月、

去歲壺陽戍卒時、

下車愛民如愛兒、

壺山蒼々壺水碧、

父老至今歌詠之、

欲爲將軍紀勳績、

天家自在麒麟筆、

願續壺民歌太平、

磨崖勒盡韓山石、

と。良輔其の詩を得て大に喜べり。郭、因て塞人の反状無きことを力言せしかば、良輔の曰く、此

の賢女の居る所なれば、其の民必ず馴れんとて、

兵を麾いて去れり。溪頭の寨の免るゝを得たるは

郭氏が辭を修めたりし力なり。洪武年中、伯玉は

賢良方正に擧げられて、徵書至りしに、郭氏又之

を止めたり。是に於て、伯玉は辭して就かず、山

林を以て終れり。三子ありて礪、礪と云ひ、

皆儒術を以て顯はれ、朝に祿せられき。少子彦器

は、即ち礪にして、字を以て行はれ、名儒第一に

擧げられ、河南布政司參議を歴て、朝列大夫に終

りたり。郭氏は、百二十餘歳の時、伯玉と礪とは

俱に先んじて卒したるに、里人其の行を高しとし

て、郷賢に崇祀せり。郭は、年老いたるを以て、一たび母家を省みて歸寧を作し、目わたり叙せる其の辭に曰く、

天甲年來度二週、

暮桑揄景雪盈頭、

五經立業儒家雅、

三子成名壯志售、

橋梓有光聯俎豆、

柏舟無憾泛橫流、

階前蘭玉森々秀、

斑綵扶來到首丘、

又數載にして卒せしに、年百二十五歳なり。長子の礪は、字を彦敬と云ひて、棲霞縣令と爲れり。その妻の莊氏も、亦書を讀みて大義を知りしかば、居常禮を以て自ら閑りぬ。元の末に、盜起り、郷民は多く山谷の間に依り、賊至れば妻孥を挈げ、巖穴に入りて之を避けたれば、一穴にして多きは百十人に至りて、男女の別無し。莊氏、獨り入らざれば、彦敬が之を促せしに、莊氏の曰く、男女

の授受は親らせず、行くときは則ち途を異にし、居るときは坐を雜へざるは禮なり。今亂離の故を以て、巖穴の中に混處して、雜然として辨ずること無きは、禮を廢するの甚しきものなれば、妾は敢てせずと。彦敬の曰く、然れども其の賊の至るあらば、且さに擄にせらるゝを如何せん。莊氏色を正して曰く、禮無くして生きるは、死するに如かず。即し不幸にして掠めらるれば、君は妾が死すること能はずと謂へるか、請ふ先づ之を試みんとて、刀を引いて自ら刎ねて死せしに、後三日にして賊大擧して其の郷を破りしかば、保全するもの無かりき。君子の曰く、莊氏は賢にして且つ智ありと。彦敬も、其の義に感して終身娶らず。論に曰く、郭眞順は閩中の豪傑なり。その賢にして智あるは、則ち陳嬰の母と辛憲英とを合せて、

一人と爲したるもの、文學と禮法あるは、曹大家の流亞なり。其の志の清高なるは、老萊、陳定、王霸の妻と、差々上下するに堪へたり。其の大年にして百二十五歳を享けしは、則ち古今未だ此れ有るを聞かずして、貞と壽との獨絶を推さるるを得ず。二子、皆賢にして芳を奕世に流せり。天の厚きこと、此に至るを得るか。「婦の莊氏は、賢徳ありて禮を以て自ら閑り、身を殺して信を明にせり。當日にありて、良人と偕に即ち穴に入らば別なきを畏れず。遺爾として軀を捐つるは、賢智の過ぐるゆゑと爲すに似たれども、三日の後に之を見れば、則ち後なるも先なるも、均しく一死に屬せり。莊氏の智は、及ぶ可からずとなす。是の姑と是の婦と、禮宗と爲す可し。誰か巾幗場の中に、遂に蓋世の豪傑無しと謂はんや。



夏月涼

水野忠敬

ところせき庭も涼しく見ゆるまで

梢はなる、夏の夜の月

諏訪忠元

たへかねしひるの暑さも忘れぐさ

宿れる月の影の涼しさ

矢田猪平

人々のあつしくといふ聲も

たえて涼しき夏の夜の月

相澤求

涼しさはいつれはあれと川そひの

月すむ宿のはしひなりけり

増山三雪子

しけりあふ木の間の月の涼しさに

秋かとはかりあやしまれけり

月下のピアノ

東くめ子

ぼらの香たかき 花そのゝ

わか葉のこかげ さまよへば

つきにうかれて かなづらん

ベートーフェンの ムンライト

そなたのまどに きこゆなり

ひと本野菊

つねを

千代の光りも ちは方に

知られぬ野菊 ひと本は

かわるに早き 夕暮の

雨に怨みの 色みせて

さびしき野邊を いたはらぬ

よをあき風の つれなくて

かゝりし露も なにとなく

ひとりあはれの 物かもひ

瀧

瀧子

瀧といへば我日の本にては、那智の瀧、布引の瀧、

裏見の瀧、霧降の瀧などぞ大なる。されども、これ

らはおのれ見しことなれば、くはしきさまは得

知らず、只めでたき山水にてながめもすぐれたる

ことなど、ものゝふみにて知れるのみ。

小さけれども、おのれのいとも親しきは紀伊國海

草郡の山にある鳴瀧なり。この山の麓には一の小

さき寺あり。寺の後を通りて山道をわくれば、道

の左右には楓樹いと多く茂れり。瀧は高からねど

水かさいと多くて巾一間ばかりの谷の小川につ  
きたり。水音いと高く、小川の流いとも清くて、  
心もすむあたりなり。さて楓樹はこのあたりにも  
多くて、晝なほ暗きばかりなるが、瀧つぼの上  
枝さしねはひ谷川にかけのうつるなど、瀧の水と  
紅葉と親しげなるいとめでたし。  
一とせの夏、朝とくより一日のあつさをこの瀧に  
さけたることあり、谷川はいと淺ければ、もすそ  
かゝげてかちわたりし、瀧見堂といふにのぼる。  
此堂は、前には瀧つぼあり、後には楓樹茂りて、  
風いと涼しくはだへ冷なるまでにて夏を知らぬと  
ころになん。けに夏は瀧のはとりにこそ、住むべ  
かりけれ、とぞ思ひし  
なるたきといふ名はなどてつきたる、其音物の鳴  
るに似たればにや、人は秋のみ來れども、われは

夏こそ と思はるれば、なつたきとやいはまし、  
と友の一人にいひつるに、ふつゝかなる名にもあ  
るかな、と笑はれたりき  
こよひあまりにあつくてたへがたければ、涼しき  
こと思はんとするに、たちまち心にかびたるは  
この瀧のことなり。文のよしあしをも思はで谷川  
の如くはしりがくに、なにとなく涼しき風吹き來  
るこゝちして身は瀧見堂にいゐるがごとし。

墓まうで

愛 子

けふは父君にわかれまつりてより、三とせ過し日  
也。母君とともに御寺にものしつゝ、やがて父君  
の御墓をわろかみまつらむとてゆく。そここゝい  
と草ふかうわけかたかるに、こなたに一すちの道

あれば、そこよりゆくに、其わたりいさゝかのちりもなく、草さへ皆かりつくしたり。しきびの葉をさしけなとしつゝ、母のうしろへにありてひざまづきして、あやしくもはふり落るなみだの露のといめかたくて、人のみとがめやせんと、かつはやさしけれどかひなし。母君も目にこそ露はもちたまはね、御ころのうちには同じなげきにかさくれたまうらむと、おもひやりまつるだにおのれの心ははりさけぬべし。御堂にのぼればやがてかねの音のひびけるなかより、しつかによみいでし御經の聲尊としとも尊とし。つゝしみてきくうちにもなき父のこのみむねにうがひつゝ、せめてらまゝでもこのよにおはしまさばなどもふおもしろふと耳に入りたるは

「凡はかなきものはこの世の始中終まほろしの如

くなる一期也。さればいまだ万歳の人身を受けたりといふことをさかず、一生すき安し、いまにいたりて誰かもとせの形骸をたもつべしや」とよみすみ聲也。げにげに今さらになげきかなしむともかひなきことよとしづかにおもひかへしつゝ、うらみ多きあだし秋の風に吹おくられて我やにぞむかふ。

水うてや

蟬も雀も

濡れるほど



説林

遊戯の方針

町田則文

私は昨年以來本會に入會をして居りまして平常は大變御無沙汰を致して居りましたですが、今日此會の方から何か話があるならばせよと云ふ御話でござりまして、甚だ不束な事でござりますが一應豫ねて私が考へて居ります事に就て御話をして見たい、且それに加へるに外國の教育雜誌に記載しある種々の學者の説を引出した事もあり

ますので、如何にも話が錯雜を致すかも知れませぬが、暫時御清聴を煩はしたひと云ふ願であります。

それで私が只今御話を仕たいと云ふのは遊戯の方針、即ち遊戯を子供に課するに就ての方針と云ふ問題に就て御話をしてみたいと云ふ考へであります。それに就きまして全体ならば此遊戯の種類等に關係しまして種々自分から材料を集めてそれに依りて問題を説きませねば本當に説く事が出来ぬと考へます、併ながら幸ひに近頃北亞米利加合衆國の某教育雜誌を見ますと、其事實を集めたものが大變ありまして、多少其等は私の申す所の一の證據になる事と考へまして、實際上の材料は姑くそれに倣りましてそうして御話をしたいと云ふ考へであります、それ故に私が

希望する所は、若し此話が果して宜いとすれば、諸君方に於いて平常兒童に御課しになつて居る遊戯に就きまして段々御研究を願ひましたならば、大變仕合せと考へます。

一体幼稚園の仕事と申すのは矢張此ズツと小學校から中學校とか高等女學校とを通じて普通教育の範圍内に屬する所の初段の仕事でありますので、即ち此普通教育を濟んで仕舞へば、段々専門の事に涉りますから、それは別問題であります。が兎に角人間を作る事業、即ち普通教育に於て人間を作る事でありましたならば、幼稚園の仕事は其一番の初階級であると考へる、それ故に幼稚園に於ては能く將來の事を考へ小學校なり、中學校なり、高等女學校なりの事を考へて其引續きの一番初めの事であると云ふ考へを幼稚園に於ては持

つと云ふ事か保育上第一番であるとか平常考へて居るそれに就てはドウ云ふ目的を大体に就てもつたならば宜からうと、云ふと、私は大体の方針に就ては矢張二つある事と考へますのであります。一は他日世の中に出て職務を執る一の準備をすること云ふ事と、モウ一つは一般の訓育、即ち人間の人品を高尙にするとか、風彩を段々貴くするとか、即ち人間の品格を作ると云ふやうな目的と此二つの目的が矢張幼稚園にもあらう、又小學校でもあらう、中學校でもあらうと斯う云ふ風に考へて居ります。其所で他日世の中に出て仕事を執ると云ふ私の意味は世の中に出て恐ろしくドウも土方とか職工とか云ふやうなものが執る所のさう云ふ極端の仕事と云ふ意味のみでない、廣い意味の仕事である、幼稚園なり學校に於て唯職業的人を拵



へると云ふ事になると、随分狭く考へますと非難ある事で、私の家はさういふものでない、さう云ふ唯苦役を取るやうなものでないと云ふ非難が動もすればあるけれども、私が申す他日世の中の職業を執ると云ふは苦しい所の仕事を執れと云ふ意味でない、人間と云ふものは何にしても職業と云ふものを執らねばならぬ、人間が世の中に出て唯人品が高い、又風彩威望が如何にも立派であるとか、種々なものを知つて居ると云ふだけでは、世の中の人間となるには足らぬと思ふドウしても仕事をやる處の人間を作らねばならぬ。ところが今日の一体の情況を見ますると云ふと兎角人品を作るとか、智識を拵へるとか云ふ方では世の中が餘程其方に一般の傾きを有つて居りますけれども、其職業を執ると云ふ他日世の中に出て職業を執る

と云ふ方には今日は實際上、各學校に於て注意の配り方が乏しいと考へる、唯學校と言へば智識を與へ、人品さへ良くすれば宜いと云ふ傾きが大變ある、幼稚園に於て課する遊戲の種類も他日世の中に出て仕事をする方の考へで、種々の遊戲を課するやうにせねばならぬと考へる、故に詰り前に云ふ通り、幼稚園に於ては二つの目的を以て保育をなすと云ふやうな事は第一にせねばならぬと考へる。

以上述べたる二目的の外に、尙ほ一つ望む所は成るべく調和的に、所謂調和的の心持を養ふにあり。子供と云ふものは、一般人類に於ける當り前の歴史發達と同じ理屈で、兎角小い時は自分勝手即ち自己心と云ふものが餘程作用を爲して居る、之を人類一般の發達から考へてもさうで、文明の

人は餘程調和的になつて居る、けれども極く未開の人民、野蠻の人民は我儘勝手である、自分さへよければ宜い、他は考へぬ、子供も同じやうなもので、ドウも幼稚の時には少しも他を顧慮せぬ、自分さへ都合宜ければ宜い、遊戯をしても自分が獨り勝を取れば宜い、自分が獨り愉快を取れば宜い、自分が獨り優等の位置を占めれば宜いと云ふ事が子供の内には流行る、それを當局者は餘程注意して行かねば我儘勝手の間人とならしむるべし。一体教育などでも昔はさう云ふやうな、唯一人々々さへ宜ければ宜いと云ふやうなやり方であつたと考へる、例へば只少數なる英雄豪傑を作れば宜い、英雄豪傑とは或る意味から言へば自分さへ宜ければ宜い、我儘勝手の間人と云ふ自己主義の極端なるものである、それを小さい時から其傾き

の多いのを、益々構はぬで置くと云ふものであるから、我國に於ても西洋各國に於ても、従前の教育は唯英雄豪傑を作れば宜いと云ふ事になつて居る、今日ではさうでない、ドウしても我儘勝手と云ふものを或る程度までは抑制して、さうして調和的の間人を作らねばならぬ、それに依つて考へて見ますると、幼稚園などに於て遊戯をさせるに於ても、餘程當局者は兒童の性質から研究して其邊に考へを向けて行かねば、實は幼稚園を設けて保育しても餘り利益する所が少くないであらうと思ふのであります。故にこれは餘程六ヶしい事である、之をドウすれば適當の範圍で、ドウすれば調和的發達をするかと云ふ事は、兒童の性質から起つて來ねばならぬ、兒童の性質を考へて來ねば唯押へ付けても適せぬ、即ち兎に角さう云ふやうな調和

的發達と云ふものを能く考へるやうにせねばならぬと思ひます。斯う云ふ大体の遊戯の方針を定むるに就て大体の事を一寸御話を致して置いて、それから一層詳しく申さうと云ふ考へであります。

其處で先づ此問題を説くに就ては、私は種々他方面より調べたいものであります。先づ大体三ツの方面から研究をしたいと思ふのです、と云ふは第一には子供が一体生れてからして即ち丁年に達するまでにドウ云ふやうな發達のものであるか、と云ふ事、それから第二には一体子供は自然に任かせて置けばドウ云ふ遊戯を子供は平常好むであらう、自然の遊戯に任せばドウ云ふ事を好むと云ふ事である、漫りに大人が種々な事を考へ、大人自分の了簡で子供に課しても、子供が一向好まぬ事がある、子供の自然に任かせて置けばドウ

云ふやうな遊び方をするか、ドウ云ふ傾きを有つか、これを餘程研究する事が必要であると思ふ、

第三には、今日種々世間に傳つて居る所の遊戯の種類類 大人の了簡で拵へてある、幼稚園でも種々澤山設けてあらうと思ふが、皆大人の考へで、種々の遊戯も作つてあるがそれは果して子供々の好む様に、能く當を得て居るや否や、と云ふ此三方面からして研究して見ねば判るまいと考へる、

第一に子供の發達の模様と云ふものは、種々生理學上の問題であるから、六ヶしい事であるが、大体ドウ云ふ譯であると云ふ事を考へて見ますと、先づ生れてから擽はずに置けば、無意的に足を動かしたり、手を動かしたり、身体を彼方此方に動かすは申すまでもありませんが、さう云ふ事は子供には勿論特性である、それから非常に物真

似をする、真似ると云ふ事が非常に盛んになる、それですからして成るべくさう云ふ時期には矢張りさう云ふ傾きを執りて教員たり保母たる者は始終正しい真似方をさせて行く、それは餘程考へて見ますと、ドウも一の事柄を真似させるも一体の模様を考へるに餘り數が多過ぎて、子供に真似をさせるると云ふけれども、真似をさせる事が多過ぎて、子供が本當に真似をせぬで済むと云ふ事が今日は多く無いかと思ふ、話をするにも種々な話をする、故に子供が本當にそれを呑込ませぬで仕舞ふ、至極分量を少なくして、さうして種々真似る事を本當に真似させ、さうしてそれを段々習慣に變化して行くと云ふやうな事が一番大事であらうと考へるであります、それが數が多過ぎて一時は判つたやうであれども、明日になれば他の事

をされると云ふやうになつて、本當の習慣に真似するは、本當の習慣に化して仕舞ふと云ふ事には今日は乏しくあるまいか、尙ほ言ひ換ふれば餘り分量が多過ぎてはせぬか、ドウしても子供は真似る事は無意識的事をしたり、模倣するは免れぬ事であるから、それを利用して極く正しい真似方をさせると云ふ事をせぬばならぬと思ふ。それから段々子供の種々の遊戯を見ますと、それに依つて發達の順序を考へれば、初めの内は家などに居て、即ち家庭などに居りまして、吾が家の一部の友達と遊ぶとか、或は段々それが發達して來て、遂には他の家の友達と一所に遊びに出掛けて行くとか、段々それが進んで行くと或は遠足に出掛けるとか、さう云う工合に發達して行く、故に吾々は其程度に適した種々な事を工夫して、さうして

能くそれに應ずるやうにして行く、それに就て種々事實があります、これは北亞米利加合衆國の子供に就て申すのでござりますから只御參考になると云ふだけであつて、本邦の兒童に充分適するがドウか知らぬ、斯う云ふ事實がある、子供が一番に能く種々の遊び仲間を拵へると云ふ年齢は十歳と十五歳の間に一番餘計あるのです、其間が一番子供が種々の遊びをする、泥を捏るとか、鬼取りをするとか、遊びの俱樂部を設けるは十歳と十五歳の間にある、それで米國に於いて遊びを調べて見ました所の學者があるが、百分中八十七だけは丁度それだけの年齢の者が這入つて居る、それからそれは子供が大人の方で組立て、やらす子供自身も種々の工夫をして居る、其工夫し居るが種々ある中に十歳から十五歳の間で拵へ

て居る、其以上になると單純になつて居る、或は遠足をするとか、或は鳥でも捕りに行くとか云ふ事になつて、遊びが極めて種類が少なくなる、一番種類の多いは十歳と十五歳の間にあると云ふ話です。それから尤も十五歳以上になると矢張段々年を取つた人が種々子供の爲めに遊びを工夫してやると云ふ事があつてドウしても年を取つた子供は其方に這入る、小さい子供は自分の工夫した遊びでなければ面白くない、さう云ふやうな譯で、兎に角十歳と十五歳の間は一番種類が多い、幼稚園なり、小學校なりて子供の遊んで居る遊戲の種類を観察して集めて統計表を作れば何歳から何歳までの間に如何なる種類が多いと云ふ事が判らうと思ふ、遊びと言つても込入つた遊びでなく、三人集まりて、鬼事をするとか、相撲をするとか或は集

つて話をするとか、物の真似事をする事もあらう、

角種々の種類は十歳と十五歳の間に自然に自

ら工夫して拵へる、さう云ふ譯であるから年を取

つたものが即ち吾々が能く勘考をして、子供の性

質に合はぬ遊びを拵へてやつても、それを子供は

面白がらぬ事であらうと思ふ、先づ是等は各幼稚

園なり、各小學校の遊びを集めて統計表を作れば、

何歳の間に如何なる種類が多いと云ふ事が判る、

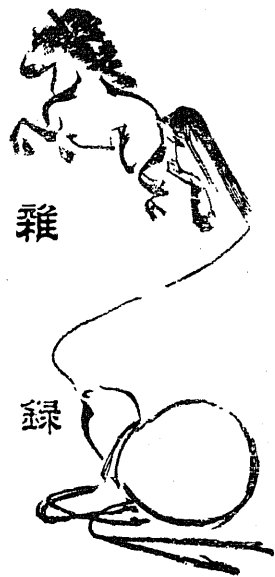
と云ふやうな事實がある。(つゞく)

むさし野は月の入るべき

山もなし

草より出で、

草にこそ入れ



雜

録

江馬細香女史の詩(承前)

小林雨峯

予は次に、女史の詩數首をかゝげて、少しく女史の詩品に對して、彼の當時詩界の驍將、星巖の夫人、紅蘭女史のと比論せんと欲す、

不聞鐘響到閨扉。曉夢沈々臥翠幃。

半點燈搖斷腸雨。故將春睡送春歸。(春畫)

船燈半點夜濛濛。一枕愁眠波響中。

夢到濃山三百疊。冷風淒雨泊孤蓬。(遊澗河)

輕舟棹下墨陀川。

萬頃涼波月湧天。

鷺宿鷗眠夜初定。

一巾清影屬詩仙。(墨江月夜)

格調の清らかなるうちにも、雨中の凄怨を寫し、

旅夢の情なきを歌ふにわらずや、

與梅相侶送殘年。

一片清香擦醉眠。

但塊鬢邊多白處。

三更酒酌獨凄然。(歲晚)

衆艷一時難併開。

萼花忽被妒風催。

紅闌多少春宵夢。

我愛空蟬蟬脫來。(讀源語五首中空蟬)

春意如泉沸不留。

擬撓青帝領溫柔。

一連技上寒暄異。

落葉蘭々獨占秋。(空若菜)

羅幃凌波月淡明。

依稀玉色欲傾城。

香魂恰似梅花冷。

本與渠濃是弟兄。(水仙)

橫斜香影奈臙臙。

正是吟窓靜夜中。

一盞寒落花有恨。

故將眞色欲爲空。(燈下梅影)

月明今歲泣中秋。

憶昨啣杯倚樓。

琴酒承歡多少事。

總爲悲淚徹霄流。(秋日作)

澗水潺湲霜葉紅。

高低路入亂山中。

斜陽一片行人少。

木末蹒跚是我僮。(路上雜詩)

寒闌寂寞掩窓紗。

秋老瀼々風露斜。

菊意與農同一榻。

日高籬畔臥開花。(秋晚)

歲晚に於ける感懷尋常一様の作に似たりと雖も、凄然たる趣さは他の詩と一貫して悲哀の趣さを

を浮べ居るに似たりや、秋日、秋宵、歡樂の慰

むべきなく、寒闌人空して風露瀼々の裡、多少厭

世の意を洩せるもの、讀むもの自から一種の感に

撲たるゝの概あり、然れともまた

磨鍼曾是幾登臨。舟影湖光入短吟。

今日舟遊奇絕甚。却從湖上望磨針。

山峰不見一尖青。眼裏唯看沃土平。

(叔月父子及遁齋。自彦根泛裏湖送余。至木原師)

萬樹風松翠濤動、金麟出沒五層城。(振名古 屋途中)

前首奇巧を弄したることろあり、句必らずしも佳絶ならずと雖も第二首の繪畫の如きと比して、躍

如として、名古屋城を目堵するが如きにあらずや、而して女史は生平花卉を愛し、墨竹を畫くの性、往々題畫の詩、咏物の作中に見るべきものあり、

花比去年多發技、慇懃愛護下簾帷。

縱能清操埋寒夜、不遣風霜迫玉肌。(聞裏盆模盛 開偶有此作)

何等の濃情ぞ、

誰種脩篁傍水灣、猶倚挺挺凌霜寒。

一饒容易窺全節、半抹朝煙掩碧竿。(題目畫 墨竹)

獨立湘江霜雪中、終年裊々帶清風。

搖來數丈青天箒、掃去人間塵土空。(墨竹)

舊時情怨憶陳王、微月凌波影渺茫。

窓底至今散龍廚、烏金打字十三行。(墨水仙)

寒鞋踏凍幾躋攀、奔走風塵衣食間。

不似前頭白雲狀、無心竟日繞峰閑。(寒山行旅圖)

感慨の狀遺問の意、自からまた寓意の深きものゝるを見る、巾幗者流の口吻にあらざるを知らしむるものあり、若し夫れ清警にして高尚なるもの明麗にして雅淡なるものを求めば、

山々收雨夕陽多、江水平舖浸翠螺。

三兩漁村垂柳外、牙頭舫子點春波。(題畫)

天地蜉蝣詎斷腸、清風明月鎮蒼々。

千年寫取又何謁、即是丹青無畫藏。

高遠にして幽致あるもの地下の坡翁をして見せしめば必ずや竹舞せん、五言題畫の句

一路離人境、傍流三兩家。漁郎能到否、

滿地墜桃花、雲起山無脚。泉濺樹露根。



芽、檐、多、架、水。不、必、設、籬、樊。

七言、五言、之を律詩中に求めんか。

破烈經霜幾幅箋。

秋來又懶寫新詩。

一叢憔悴幽堦外。

半歲榮枯奇石前。

難障夕陽涼傘影。

何妨夜雨旅窓眠。

莫言風雪無清操。

曾入王維畫裏傳。(敗蕉)

秋宵如水夢頻驚。

林樹鴉啼三兩聲。

更漏稍稀添被冷。

殘燈漸暗覺窓明。

一聯偶向閑中得。

萬感渾從枕上生。

展轉不眠思舊友。

悟看落月屋梁清。月夕不寐

樓前垂柳已藏鴉。

樓後海棠春半過。

燕雀新泥畫簾雨。

雁行小柱素筆歌。

人含悲處言尤少。

花欲殘時香倍多。

未免紅顏恨凋謝。

寫將心事付吟哦。(惜春)

座枕江流不設門。

五家三戶自成村。

漁歸磯畔餘醒氣。

潮退沙頭疊浪痕。

暮靄衝飛雙鷺白。

夕陽斜照半林昏。

魚蝦換酒知多少。

隔柳時聞醉語喧。(暮過漁村)

敗蕉、後聯の二句自から凄愴の氣を含むの間、また大に感慨を叙せる、月夕客枕驚き易さのところ

に、展轉して萬感抑々かたきものある、惜春の情、胸中に湧湧し來りては人含愁處言尤少と喝破せ

る何ぞ夫れ凄絶、哀絶なる、バイロンの如き狂熱

はかゝる漢詩人には到底求むべきことにはわらね

ど、心中悶々として洩らすに地なく、止むなくし

て漢詩の上に描寫し來る、其情實に察すべきもの

あり、

五言の詩中に求むれば、

久別會中酒。相逢鬢上霜。人皆過半百。

節已近重陽。滿酌杯浮綠。全開菊吐黃。

周旋同醉地。自異昔年場。

佳會難常得。閑遊亦覺忙。參僧雙履雨。

看菊一笻霜。昨醉連今醉。他鄉即故鄉。

預愁行樂地。明日夢茫茫。(京城秋遊呈諸舊交)

苦樂人間老。炎涼歲月流。一家同骨肉。

六裏乏春秋。思夢逢亡友。衰年感昔遊。

梅花舊顏面。相見冷香幽。(歲晚)

見詩如見面。聞信似聞音。早晚消離恨。

相逢話此心。花邊滿樽酒。月下一張琴。

總入清宵雨。可知交態深。(奉寄鐵心大夫。兼贈研山中山兩君)

詩人的本領はかくの如くにして始めて現し來るなり、泣くと雖も、何物をか捕え來りて情を遣るなり、笑ふと雖も「自然」に對して竊かに悲を托するなり、若し夫れ古體詩に至りては、

櫻開方人落。櫻開期歸家。吟笻三十日。

無日不着花。東山千堆雪。西郊萬朵霞。

遊春雖之樂。奈此鬢上華。故交半鬼錄。

知己多天涯。每經昔遊地。轉覺悽愴加。

一醉花底酒。強就旗亭賒。(己酉遊京作)

春風徐ろに吹くの處、櫻花の爛熳たるに對しては

如何なる沒風流漢と雖も、歡喜せざるはなき、こ

れ人情の常なりと雖も、女史既に齡を重ねて、故

交多くは鬼藉に上り、我身はまた定まる處とは

更らになく、昔遊の地に遊びてかくの如きの情思

また襟袖を濕はすものはまた止むを得ざるものあり、然れども詩人は決して泣き暮し、哀れに過ごすのみ其の能にはあらず、若し豪爽を極め天空海

瀾の文字を叙す、左の詩の如きは女流作家中多く

之を見ざるの類たり、

二月念六日。布帆發桑城。海面湧旭日。

天色入朝晴。

豈料雲行亂。

須臾鬪鼉鯨。

駭浪高於屋。

船從波底行。

未知向何處。

洶々千雷鳴。

柁工面如土。

一舟暈如醒。

僅得認遠嶼。

衆意漸似平。

若能審無假。

自齊死與生。

可憐同舟客。

各自稱佛名。

(二月念六、舟過七里濱  
遇大風浪僅得上敷村)

全詩實景より着筆し來る、曲折轉接力を費さず

して、而かも人をして躍如其の狀を想はしむ、捷

手辣腕にあらざれば能はざるところなり、其の形

容の見るべき、其の厄境に於ける覺悟、悠々とし

て迫らざるが如きものあり、閨秀詩人、多くは輒

弱に流れ易く、然らざれば得意滿面、之をしもか

の星巖翁が、夫妻相携へて、四方に遊び常に琴瑟

の狀ありしやを思はしむるものに比すれば、自か

ら詩人として、女流作者として二者の差異を顯別

するに難からざるものあるを見るべし、

紅蘭女史の詩を抄して聊か左券となすべし、紅

蘭は齡十七歳にして星巖に嫁し、星巖に仕ふると

極めて懇篤、星巖の南船北馬其の寧處なきの日に

あたりては、紅蘭また之に従ふ、西征して九州の

地に向ふや、隨つて作するところの詩、卅一首あ

り、京師に歸りて、芙蓉鏡閣集あり、江戸に入り

三十五首あり、風調或は星巖に摸せるものあり、

總じて何れも愉々快々の趣きを備ふ、西征の際、

除夕の感懷に

思歸三歲未能歸。

紅燭依微照曉幃。

憶得東風舊粧閑。

姉呼妹喚整春衣。

其他、

太平風俗競豪奢。

不問桑麻只問花。

我圃亦栽桃杏在。

暫拋針線弄春霞。(春興)

閨窓人靜夜風清。春到海棠殊有情。

一笑貧居出無燭。倩他明月照庭行。(春夕)

細香の春風、春夕に對して哀思動くに比して之れ

は照々として温かなるものあるなり、家庭の趣味

に尠からず喜びを浮べつゝあるなり、故に詩中に

巧麗なるものを求め、繊細なるものを求むれば蓋

し尠しとなさざるなり、

澹雲籠屋暗。微雨逗簾涼。谿近聞寒水。

林疎見夕陽。殘楓留酒氣。晚菊帶詩香。

幽賞曷云已。低徊吟澹忘。

情思の羨むべきが如きものは、

四隣人已定。燈火夜蘭殘。雪逆月光白。

雲隨風勢圍。家貧爲客久。歲晏怯衣單。

敲半起烹粥。思君吟坐寒。

客中にありても悲みの狀なく、思郷の情を寫すも、

其れ程にはわらざるなり、思郷の句中或はた古

人の換骨をなして悲哀をわざとらしく咏ぜしが如

きは随分いかゞはしきものなきにわらず、然れど

も流石は星巖の妻たる程なり、中には格調と云ひ、

風尙と云ひ自から稜々たるものなきにわらず、

誰剪梧桐失鳳棲。丹山萬里夢魂連。

多才敢望蔡雍女。知道愧非王霸妻。

黃壤無由終養育。青冥何路共昇躋。

鹿車後約分明在。茅舍柴門白水西。(客中述懷)

流光與客共匆匆。秋老羈懷慘澹中。

灑笠寒聲黃葉雨。薰衣午氣紫芒風。

詩書只合畢生業。鍼菴動拋經日工。

舉案之賢妾何比。遐征幸侍五噫鴻。(旅懷)

擧げ來れば限りなし、たゞ夫れ紅蘭は秋風の蕭條

は幽谷に泣き委ひの白百合の如きか、あゝ細香女史の生涯、嗚呼何ぞ悲しき歴史を以て満たさる此の如きぞや、女流にして女流らしからず、其の一生を終らば細香の如きの最後をなさんば必せり然れども『湘夢遺稿』は遂にわれをして、人生の慘事を繰りかへさしむ、あゝ

附記、われ東西に旅寢して此稿を全ふすとを怠り讀者にそむく事多し、随つて無雜に筆を下す、讀者願くは其の心して讀みたまはらんとを、

附記、左に中島樸隱、大槻盤溪諸氏が細香女史に贈りし詩を得たれば掲ぐ、いかに女史が當時文士の間に重ぜられしかを知らるに足る、

贈細香女史

中島 樸隱

滿窓竹影夜蘭騷。

知汝茲時弄瘦毫。

月姉相看合相慰。

人間無復郭崇韜。

全

大槻 盤溪

別來客易換炎涼。

幽竹猶憐水墨香。

一穗寒燈亂書底。

滿窓夜雨夢瀾湘。

兵隊ごっこ

和歌子

●模倣と想像の盛なる時代になる幼児の集まれる幼稚園の此一室(在東京市)、時には全室、海となりて、腰掛にて作られ又は木片にて積立てられたる軍艦の幾艘浮ぶ事あり。時には隅田川となりて河蒸涼船の往來するあり。彼處に桃太郎の躍れるあり。此處には自稱渡邊綱の竹馬に乗りて威風(?)四邊を拂へるあり。此隅はオバサンゴッコにつかはれて一家庭となり、彼窓際は螢となれる二

三兒を腰掛にて圍ひて大なる罎籠と名づけられ、  
 これを養ふ一二兒の水を與ふるあり。全幼兒雀とも  
 鳥とも雁ともなりて室内を飛びまはり、室は化し  
 て鳥の飛ぶ庭とも野とも山ともなる事あり。誠に  
 千態萬狀、社會のいろ／＼の事物は小さい人達の  
 上に反影となりて現はれます。幼兒でございます  
 から幼兒の社會の事は無論行はれません。其上に大  
 人の社會でする事が幼兒化して摸倣せられるので  
 ございます。

●十人許の男兒が手に手に竹切を持ち鐵砲に擬し  
 て居る。一兒「集レッ」と叫び、衆兒列を作る。  
 「オイチニ」のかけ聲と共に、一同足並そろへて歩  
 き出す。前に「集れ」の號令を發したる大將(彼等  
 の所謂)は、衆兵士と別に離れて前の方に歩み、  
 時々全隊を見巡りて足並の揃はぬものに注意を與

へる。兵士は「オイチニ」をやめて、皆異口同音  
 に「ダツピン、ダツピン」と言ふ。之は「左右」な  
 ので、体操の時の號令をかやうに聽き取つて居る  
 のである。やがて唱歌好で音樂の耳ある一兒先登  
 となり、「テテテター、テテテター」と口拍子  
 をとる。しばらくする内には幼兒ながらに步調が  
 整て來る。傍觀して居る女兒が「アンナニヨクン  
 ロヒマスヨー」と言ふので、皆喜んでなほよく  
 注意して足並を揃へる。今度は「駈ケ足ッ」の號令  
 が出る。一同駈け出す。忽ち二方に別れ、敵味方  
 となりて打合をする。次にかの大將「ミンナ馬ニ  
 ノルケイコヲナイ」と言ふ。兵士の内には化し  
 て馬となるあり、やはり兵士で居るもあり。こゝ  
 に何騎かの騎兵ができて駈けまはる。躡く者、人  
 が馬を後に置き去りにして駈け出すものなどさま

さまで、之は皆凡て落馬の体となるので、「みんなヨク落ちルデセウ」と言つては私を見て笑つて居る。次はマジメに騎兵の列を作り「ハイ〜」と言ひながら、落馬せぬやうに氣をつけて駈ける。之が見る間に砲兵にも歩兵にも化して、大砲や鉄砲を打つ。鉄砲は例の竹切をかまへて、ねらひを定め「ドーン」と口で言ふので、大砲はさすがに此細い棒では物足らぬと見えて、二兒づゝ兩手を組み合せ、一方の手を前に突き出して「オホヅ、デッポードーンドン」と言ひながら歩きますので。すこしたつと又例の大將、「雪中行軍ヲシヨ」と發起する。一同其處に倒れ伏す。是れ雪中に埋れたる体で、二三兒は搜索隊となりて、棒で雪を掘るやねをし、徐ろに兵を起して藥をのますなどの事がある。間もなく皆立ち上る。今度は二兒番兵

となり、相對して姿勢正しく直立する。其後から「サー天子様 皇后様ノオトホリデスヨ」とささふれしながら、一列の幼兒肅々としていかにもマジメな顔をして無言で通る。と見て居るとまう何時の間にか、二三兒は向の方に駈け出して腰掛の上に正座し、衆兒が下から手を合せて拜んで居る。上に正座した兒等は無言でマジメにすまして居る。「ソレハ何デスカ」と問ふと「招魂社に祭ッタデス」と答へる。之をきいた私思はずふき出しました處が、參拜人も祭られた人も皆わけもなく笑ひ出しました。

右は或日實際幼兒の間に行はれました兵隊ごつての大略でございます。

## 幼稚園の遊嬉

## 十八、汽車

甲乙二組各二行となりて相向ひ、先づ乙組二人つゝ互に手を連ねて隧道を作る、一同汽車の歌を唱ひ「動き出す」に至りたる時、甲組汽車となり二行の幼児交互に入り一行となりて、隧道をくゞり始む、先頭の幼児隧道を出づれば元の位置と反対の方向に進み、再び二行に復して元の位置に歸り、更に隧道となり乙組は氣車となりて前法の如くす。

## 十九、探し物

先づ隠し置くべき品物を一同に示し置き、後之を探し出だすべき幼児(一人或は二人)を出して眼を覆はして、一同の中に物品を隠し置き、而て樂器の音に據りて探し出さしむ。樂器の音は搜索者が隠したる物品に近づく時は漸次強大となり、遠ざ

かる時は微弱となりて以て其場所を暗示するなり。

## 二十、花賣

「花賣り」の唱歌に伴ふ遊嬉なり。先づ衆兒にて圖を作り、一人の幼児眼を隠し五種の花(赤き牡丹、白菊、黄なる山吹、紫の董菜、青き桔梗、但し五種にて多きに過ぐる時は三種にしても宜し)を持ち花賣となりて圓の中に立つ、次に此花賣りが賣らんとて取り出す花を見て、周圍の幼兒は其花に相當したる賣手の唱歌を唱ひつゝ、右或は左に廻れば、花賣は其聲をしるべに其花を或る一人の幼兒に賣り渡し、よく其花と買手とを記憶し置く、買手は又手早く其花を後ろに隠し置く、かくて其花を悉く賣り盡したる時、眼の覆を取り去り周圍の幼兒が買手の唱歌を唱ふに應じて、前に買ひ取



りし人を求む。若し其人を誤まる時は、誤まりて名指されたる人代はりて花賣となり、既に前の花賣の集めたる花あらば之を受け取りて残りの花を求む、此花賣亦途中にて誤まる時は、其時名指されたる幼児又代はりて花を受け取り残り花を集む、若し賣手が一も誤まることなければ最後に名指されたる幼児出で、次の花賣となる。

二十一、時計

二人の幼児圓の中央に立ち、互に右手を取り左手を伸ばして時計の針に擬し、時計の歌を唱ひつゝ廻り、一回の歌の終はると同時に止まり樂器に依りて報ずる時計の音を二人に答へしめ、其答の當りたる時は針にて指されたる幼児二人代はりて針となる。

二十二、花輪

衆兒圓形を造り（一人或は數人の幼児其中に入りて心となるも宜し）豫め五等分（花瓣の數によりて異にす）して其分點に當る幼児五人を定め置くものとす、さて進行の曲に由りて圓は右若くは左に回轉し始め唱歌を唱ひ出すと共に前に定め置きたる五人の幼児は中心に向つて同時に進み行く時は、其形は即ち五瓣の花形となるべし、再び進行の曲に伴ひて元形に復して回轉し、又唱歌を唱ひつゝ、花瓣の形をなすものとす。

二十三、又行進

衆兒二行となり、二人づゝ手を取りマーチに合せて進み行き、手を連ねある儘、交番に左右兩組に別れて圓形に進み、反對の位置に於て出遭ひたる時は左組は二人づゝ手を取りたるまゝ、右組二行の間を分て進む、次に出遭ひたる時は右組左組の

間を進み、次に出遭ひたる時は兩組とも手を離し互に一行を夾みて進み、次に出遭ひたる時は前に内行せしもの外行し相夾みて進み、次に出遭ひたる時は手を取りたる二人左右より交番に入り、最初の如く二行となる、既に二行に復すれば互に手を放つて左右に別れ進み、其先頭出遭ひたるとき、左右より交番に入りて一行となり、更に手を連ねて一列となり、次第に圓を作り續いて渦まきをなす。

二十四、四列行進

四列に並び進行の曲によりて種々の方向に行進す。

二十五、鎖

圓形を造り奇偶二人づゝ向ひ合ひて組合をつくり置き、樂曲に合して奇數の幼兒は左に、偶數の幼

兒は右に進むものにして、最初は互に右手を取り各自の方向に進みながら右手を放して左手にて出合ひたる兒の左手を取り、次に其手を離すと同時に又右手にて更に出遭ふものゝ右手を取り、かくして遂に我が組合に會ふこと二度目にして己む、此時樂曲を變じ最初の八拍子間圓を作り、圓心に向ひて四歩進退すること二回、次の八拍子間に再び各組合を作りて前法を繰り返す。

忘れな草の由來

日本名で瑠璃草といふ可愛い草花がある、春から夏にかけてうす紫の小さな花が咲いて花の形とい葉の格好といひ、まことに優しく出来て居る。此花は英語で Forget-me-not (な忘れそ) と呼ばれて居る、獨乙語でも同じ意味で Vergiss mein

nicht と呼ばれて居るが其名の由來に於いては  
ろく説があるけれども、南方獨逸邊では、次の  
様に傳へて居ること。

或時一人の武士が、愛する情人と涼しい河邊を散  
歩して居つた所が、折しも其河岸にはいろ／＼な  
美しい花が咲き亂れて居たので、婦人は男に向つ  
て、あの花を取つて、この花をなと求められる儘  
に男は一々摘み取つて與へた。所が、最後に、婦  
人は遙か水のあなたに可愛く咲き揃つて居た瑠璃  
草に眼を留めて、「お序でにあの花も」と望んだの  
で、男は、やがて、そを取りに急いだが、あはれ  
忽ちにして底知れぬ淵の中に足踏み滑らして陥つ  
た。將に沈まうとした、其刹那に彼は、漸くにし  
て摘み取りたりし、瑠璃草を一つかみ、岸邊の婦  
人を目がけて投げ與へつゝ、

ゆめな忘れそ！ Vergiss mein nicht！ と叫び  
ながら、とう／＼死んで仕舞つた。

之からして、あの可愛い小さな花は このあはれ  
な名を負うたとの事である。そう思つて此花を眺  
めると。氣の故でもあらうかしみ／＼と形見の哀  
を殘して居るかの様だ、まして夏の夕暮、露の雫  
の宿れる姿など

忘るなの言の葉くさは枯れぬれど

思ひいでおはき花のすがたよ

(牧羊)

樹蔭の獨語

夏山みどり

避暑

常に、青々とした山の邊りや、清らかな水の邊り

に御住おんすまひになつて居ゐられる方は、夏なつが來きたからといつて、別段べつだん周章わて、逃げ廻まはるにも及びおよびますまいが、兎角とかく都會住わいすまひの身みは、頓とんとそうは行ゆかぬ様ようで、そら夏なつだといへば直すぐ大磯おほいそとか、逗子せしとかへ逃にげて廻まはる、そら冬ふゆが來きたといへば、忽たまち、熱あつ海み、修善寺しゆせんじあたりへ避さけて廻まはるといふ風ふうで、それと思おもふと、結句けつぐ地方ちほうの住すまひが、どれ程ほど安樂あんらくか知しれませぬ。

この程ほども、家庭かてい雜誌ざしといふに、名家めいけの家族かぞへ的てき避暑ひしやうの考案こうあんが載のせられて居まりました。先まづ柳澤やなぎさわ伯はくの航海かうかい旅行りょこう、面白おもしろいことは面白おもしろいし、有益いうえきも有益いうえきですがともども、吾々われわれ下しもつ方かたの者ものには眞似まねは出來できません。其他その他は大抵たいてい大同小異だいどうせういで、一家族かぞく、父ちちも母ははも息子むすこも息女むすめも祖母そぼろさんも、お祖父おぢいさんも一家舉いっかこつてどこか、田舎いなかの海邊うみべへ一軒げんの家いへを借かりて、そこで自炊じひじ

して此夏このなつを過すませば、費用ひようも至極しごく簡單かんたんで、且かつつ最ももつと有益いうえきだといふお話し、之これは何人なにびとも贊成さんせいだと存ぞんじます。一番ばんよくつて、一番行ばんぎんはれ易やすい様ような御話ごわしですが、とかく私わたくしどもの知人ちびとの範圍はんい内で、此様このような方法はふを取とる人ひとの少すくないのは、やはりそこに何か事情じじやうがあるからでせう。

讀賣新聞よみうりしんぶんに避暑ひしやうの菜さいと題だいして、醫學いがくの大家だいかの意見いけんを出でされて居ゐますが、之これは、避暑ひしやうなどに御出ごいでの方かたの宜よい參考さんかうでせう。海うみよりも山やまの方は避暑地ひしちちとして宜よしいといふお説せつも見みえましたが、私共わたくしどもは、別べつにおさしみを頂いたきたいからと申まうす譯わけでもありませんが、どうにも海うみの方が氣きが清せい々せきせきします。遊あそぶにしても、運動うんどうするにしても、いろ／＼變化へんわがわりますから。

同じ新聞しんぶんにも出いで、居ゐりましたが、夏休中なつやすみちゆう、學校がくどう

の児童を一團にして、山とか海とかに旅行をやつて下されると教育上至極宜い結果を見ませう。長い休み、然かも、どうかすると怠眠を貪り易くなる夏の休みの間、どれ程家庭で氣を附けても、頓と學校でやつて頂く様に規律的に行きませんで、とかく不衛生に陥り、おまけに折角學校生活に馴れた規律が壊されます。だから、僅かの費用で、夜は樹蔭冷しい所で、テントの下に眠るといふ風でズーツと續けて旅行でもさして頂くとどれ程有益だかも知れませぬ。

病氣

井口めぐりさんのお話ですが、彼國の學校で生理の教授を受けて居られた時分、教師から、傳染病の名を知つてるかと聞かれたので、コレラとお答へになつた相で、所が、同じ組の生徒中、誰もコ

レラといふ病氣を知つた者がなかつたので、井口さんは太變に赤面せられたと申す事でした。又久しく英國に留學せられた、川村さんのお話に「一體日本人ほど病氣に精しい國民はない様です、私の居つた學校などでは、病氣といへば、頭痛、風邪、齒痛、痛腹位より外は、誰も病氣の名は餘り申しませぬ。日本人だと、すぐ肺結核がどうかとか、肋膜炎がどうかとか、赤痢とかペストとかいゝるゝの病名、のみならず、其病證までも存して居られる方が多い様ですが、彼國では一向そんな事は知らない様です」

自然に起る病氣もありませすけれど、大抵は不注意不衛生などいふ不徳から起るのが多いのですから、どうかお互に注意して餘り病氣の名など知らない位にしたいものです。

## 公德

東京市に、日比谷公園が開けましたに付いて、誰かこれには、東京市民の公德の試験所だと申した事もありませんが、事實、同公園は公德を守らない人に依つて、非常な迷惑だ相です。例令ば齒のついた下駄、足駄等で踏んでならない所も構はずに踏みつけて齒跡を付けたり、芝生を荒らして見たり、其他いろ／＼の不公徳をやつて顧みない人が多かつた相ですが、殊に聞き悪いのは、學校生徒などの団体觀覽で、やつぱり、公德を顧みない人たちがあつたといふ事です。

近來東京市の某小學校長が、公德養成の方便として、児童に、市中に散見せる樂書さを消させる事を實行し始めた相ですが、二三年以來大に公德の聲が高まつたにも係りませず、近頃頓と低く、

なつた際、至極結構な思ひ付きだと存じます。私共が、殊に學校生徒方に注意して頂きたいのは道路の左側通行は、お巡りさんの注意を受けないでずん／＼勵行して頂きたい事四五人も横に、擴がつた儘で、何や乎やお話などしながら、ぶら／＼お歩きになる事を已めて頂きたい事、これは人の邪魔になるのは勿論、体裁も餘り宜しからず、往來はなるべくツサと歩く習慣にしたいものです。

因に、亞米利加邊りでは、往來で人にブツつかりますと、日本と反對にブツつかられた方の人が、御免なさいといつて謝する相です。つまり、ブツつかられる様な邪魔をしたのが悪かつたといふのです。開き戸の向ふに、人の居るを知らないで、此方からガタンと開けて、向ふの人を痛い目に遭

はす、お氣の毒さま、どうも、頓だ粗相でと此方  
からいふべきを、矢張向ふから、謝する。どうも  
邪魔な所に居て、あなたに氣の毒な思をさせたの  
は私の罪だといつてあやまるといふ風です。

勤儉

勤儉といふ事は、昨年あたりから、俄に聲が高ま  
つた様です、至極結構な事と存します。この事に  
付いて、私どもの考へて居ますことの一二は次の  
様です。

(一) 家庭の支出中で、雜費の一項は、一番に狂ひ易  
いので、最も之に氣を付けること。

(二) 一時の出來心で物を買はぬこと。出來心で買つ  
たものは、決して必要なものでありませぬ。或人  
勸工場に這入る毎に、目的の品物を買つて仕舞へ  
ば、もはや他のものには一切目をつけずに通り過

ぎたといふ事です。

(三) 月の終に決算をした後に、支出表を一々調査す  
ること。費つただけ費つたのだから、何も見るに  
及ばぬといふ人もありますけれど、それならば別  
に帳面に記入する必要もないといふ事になるので  
す。ともかく、其月中の支出を見まして、或は餘  
計な支出をしては居ないか、不必要な費ひ方がな  
いかを見て、其次の月の參考にすることが必要で  
す。

編輯局より

▲日に増し、酷暑に向ひ候、筆硯益御雄健に渡  
らせられ候事と存じ候。諸姉諸君には、今日此頃  
何れも、山青く、波白さ邊に悠々御清涼の御事と  
存じ、欣羨之至に堪へず候。紅塵萬丈、蒸すが如

さ東都の生活、わはれ御惻願上候。

▲本誌本號は、暑中休暇に際し記者何れも公私に多忙を極め候上に殊に編輯主任者に於て、さし

はる事の候て、存外編輯に粗漏を極め候事、偏へに御海容を願ひ候。但し、其間に於て、聊か、本誌に光彩を添ふる事を得るに至りたるは

▲本號より、木版挿繪に力を入るゝ事を得るに至りたる事に候。當地青年畫家中の白眉たる某畫伯は、特に本號より其靈筆を揮はるゝ事を約せられたれば、爾後の本誌は之に依りて、大に其面目を一新するに至るべくと存じ候

▲尙次號には、擊水氏の讀書餘錄に、シルレルの名文婦人氣質善惡兩而鏡の梗概出づべく、之によりて婦人の感情の如何許り極端に走せ易きかを了知せらるゝ事と存候。次に東基吉君は、多分幼

稚園案内と題して、精細に幼稚園の理論と實際とを紹介致さるべし事と存候。

▲更に又、本誌史傳欄に於て、下村教授と相并んで、縦横の史筆を揮はれし米溪子、雜錄欄に雄健の文字を弄せられしや、て君は、共に目下故山に歸臥中に付さ本誌には執筆せらるゝを得ざりしもやがて、次號よりは、更に兩君の精彩縱溢せる文字に接すべくと存じ候

▲實は、毎々當地に於ける女學校、幼稚園其他の學校等を參觀致し、其記事を掲載致したき者に候へども、何分公私の事務多端を極め、其意を果さず、其残念に存じ居り候。併し、何れは、必らず其都合仕るべくと存じ候

▲先は之にて欄筆仕るべく候。炎暑之候折角御自珍專一と存じ候。





●女子高等師範學校

本校は先月四日を以て、

本學期の終業式を舉行せしが、附屬校園は何れも

十日各終業式を舉行せりといふ▲附屬高等女學校

専攻科に於ては補缺として各科に生徒募集中、入

學試験は九月施行せらるべしとのこと。

●府第一高等女學校

に於ては先月十九日學校

紀念會を七軒町の新校舍に於て舉行したり。尙各

學年に於て目下補缺募集中、入學試験は九月との

こと。

●東京音樂學校

先月十日卒業式を舉行し、併

せて卒業生、在學生徒諸氏の演奏會を舉行したり。

第一部に於ては大島校長の報告、卒業證書の授

與に次ぎて賞品の授與、校長の訓辭、文部大臣の

祝辭、卒業生總代の答辭あり、續きて第二部に移

り卒業生諸氏の演奏あり、例に依りて來賓聴衆堂

に充ちて立錐の餘地もなかりき。

●東京女藝學校

市内四谷區十二丁目なる同校

は、井上行信、福井學圃等諸氏の設立にかゝり、

各科ともに適良の教師を得たるが中にも、殊に修

身科は南條博士之を擔任し、懇篤周到なる教授を

施さるゝ由なるが、同校の目的とする所は、女子

に必要な技藝、學術を授くるに在りて、去る四

月十一日より開校せしが、目下尙生徒募集中なり、

尙詳細は次號に於て報導すべし。

●婦人割烹會

近來家庭に於ける割烹の趣味漸

く加はり來り、此際是非共純然たる割烹學校の必要を認むるに至りたるより、今回外務大臣官邸爾庖厨主任宇野彌太郎氏及び東京女子共立職業學校割烹教授岡野折枝女史其他知名の諸氏發起となり、彌麴町區有樂町三丁目一番地に校堂を新築し學科を普通科速成科の二つに別ち、本月より専ら日本料理、西洋料理、和洋製菓、食卓の粧飾、支那料理、其他すし、漬物等家庭に切實なる食品の調理を實地教授すべしといふ。

●運動場公開の建議 東京市に於ては、市内の公立小學校の運動場を放課休業の際には公開し、一般の人民に使用せしむることとなりしが、全國に於ても繁華の土地にて、人民の運動場少き所は此例により、公開すべき旨、日本體育會長より各府縣へ建議せしよしなり。

●市内公園の運動器械 日本體育會にては昨年六月以來市内各公園内に運動器械を配置し、體育を普及せんと計畫し、既に上野、淺草、深川、芝、日本橋の五公園内に第一期の設置を了したるを以て、更に既設の場所には之を増設し、又は改善をなし、新設の日比谷公園にも既に設置の出願中なりといふ。

●對男子反情婦人會 英國のデリー、エキスプレッスの報道に依れば、近頃全國に於ては凡ての男子に對し情を有たぬと云ふ婦人の一協會設立せられたりと、事務所をガイドフォードに置きて、少女隱遁所と名け、會長あり書記あり、何れも妙齡の婦人にて、嬌名噴々たる者なるが、其規則といふは左の如し。

第一條 本會々員は年齢十七歳以上にして衣服

は長き裳を着け頭髮は清潔に梳るを要す。

第二條 會員は總て男子の誘惑を斥け戀愛を排し如何なる理由ありとも絶對的に婚姻を拒絶すべし。

第三條 會員は婚姻を冀ふが如き意思薄弱の婦人に對し諄々理解を與へ其心を醸さしむるに努力すべし。

第四條 會員は自ら獨立生活の途を求むべし。

右の條規に違背する者は五リール以上の罰金を課す但し男子に對する交際單に友誼に止まるものと認定する時は之を許容する事あるべし。

●傳染病媒介としての蚊

墨西哥灣の米國船舶檢疫事務官グラブス氏は、蚊が黃熱病の種子を船舶によりて何處まで運ぶの力あるやを研究したるに同病流行地たるベラクルズ港(墨西哥)を出帆

し十七日にて到着したる船舶八十二隻中、三隻は確かに蚊に病毒を含み居たり、左すれば蚊は墨西哥より米國の港灣に病毒を移すの力あるものと見るべし、又氏の實驗に據れば蚊は海岸より四五里の沖に在る船舶までも飛び來りて病毒を移すの力あるが如き、尤も此等は珍らしき事なりといへり。

### 兵庫縣通信

在魚崎通信員 平 岩 學 洋

●降雹 加西郡北條地方去る六月二十一日稀有の降雹ありて、作物蘭草等の類一般に害を受け、

蛙蛇の類の斃死したるものも多かりし由。

●姫路師範學校近事 同校にては七月十六日より二週の豫定を以て加古郡高砂港に於て臨海事業

兼水泳の講習を開き、右講師には伊勢御海浜本部

員二名を聘す、其の他地理歴史博物音楽の學科をなし、傍ら夜間は地方有志者を集め、幻燈會を開催する由。

●日本紡績株式會社 同會社にては世の進歩に連れて大に考ふる所あり、昨年九月より工女教育なる者を開設し、其の後困難をへて漸次進歩發達の道途にあり、其の一般を示さんに工女中の志望者を集め三組に分ち、夜勤の工女は午前七時より晝勤の工女は午後七時より、各二時間宛授業をなし、其の學科は一週修身二時間、算術二時間、國語六時間、裁縫四時間なり。現今生徒數は百三十餘名にして是れ等の工女は日に十二時間の勤勢に服したる後なれば其の困難思ひやらるゝ程なり、尙ほこれ等生徒は十歳より二十四歳までの女子にして、其の上殆ど日本全國中より集りたれば、

種々の事情のために教育法も中々困難なりと主任教師某は語られき。

●西宮高等小學校 同校にて本年春季体格検査の結果二百餘名の眼疾者を出せしため、同校醫堀内某は藥品など自辨、生徒は無料にて、下懇篤に治療しつゝある由、君の如きは稀に見所なり。

●女子修藝學校 御影町私立御影教育義會にては針子屋的教育の不完全をなげき、明治三十四年女子修藝學校を設立し、爾來益盛大に赴きつゝある由、尙ほ其の目的は婦徳の涵養を旨とし、修身裁縫家事國語等を授け、併て算術等の如き日常必須の學科及隨意料として音楽生花抹茶等を授くるにありと、修業年限四ヶ年生徒定員五十名、入學程度は尋常小學卒業以上其の他經歷ある者は試験の上相當の學級に編入する由。

●幼稚園えいごえん 同校内に御影幼稚園なる物設立しありどうがうない みかげえん  
り何れ公務の餘暇を以て參觀の上通知する事とすいっ たらび よか もつ きんらんちうへつち  
べし。

### 新刊紹介

●普通歴史唱歌 全三冊

齊藤 斐 草 作歌  
鈴木 次 郎 作曲

日本の部が一冊其他東洋の部西洋の部各一冊合せて三冊で全部となつて居る。著者の言によると、「無意な名詞と年代とを面白く連絡せしめ無限の興味を以て知らす」の間に歴史思想を養成せん」とするといふ事で、至極よい思ひ付である。著者は、師範學校、中學校等で多年歴史教授の経験を積まれた人で、本書が、普通のものに比して、史的事實の確かな事は最信する事が出来る。「史的事實の撰擇に重きを置き文字の彫琢にはあまり意を用ゐず」との事であるが、文章も中々立派である。其上鈴木氏の作曲は、實によく適合して再誦三誦措く能はざる感がある、中學生師範生には好個の吟料である。(發行所 神田區猿樂町二三 山海堂)

●少年世界文學 第十三編

さ、今度出たのは、名高い頼光四天王です。面白いことは受け合ひ、附録には冠者丸といふ、まことに可愛相な話がつて居ます(定價十二錢)

●水滸傳物語 上卷

通俗世界文學の第四篇で、彼の有名な大冊の水滸傳を僅々一二頁つゝの上下二巻とせられた其第一冊である。本編には百八人の豪傑の中、魯知深、武松の二人が精詳に寫し出されて居る(一冊二十錢 以上神田裏神保町九、富山房發行)

●家庭新聞 第三號 月二回發行

地方發行物としては、最も体裁の揃つた新聞で印刷から挿繪、中々立派なものである。論説、家庭、社會、學校と家庭小説、雜報、おとぎばなし等の諸欄一々面白くて有益な文字が多い、東京邊りの營業的印刷物などに比して、まことに床しい雜誌です(定價一ヶ月七錢五厘。發行所 熊本市南新坪井町二十三 家庭新聞社)

●兒童の歴史 前編

山本翠煙編

豫ねて、廣告に依つて、本書編述の企てのある事を知つて、頗る有益な事だと思つて、其出來の日を待ちに待つて居た所が、此頃編者翠煙君から愈出來たといつて一本を寄贈せられた。打ち見た所、自分が廣告で以て豫期したのよりは數倍の價値を認めた。先づ紙質表紙を始め一般の體裁が、思ひ切つて立派に出來た所は從來の日本製のものに比較して、殆んど別製の感がある。さて内容はどうかといふと、最初の口繪二枚一は西洋婦人、一は日本婦人何れも愛くるしい幼な兒を抱き上げた所は、見事なもの、次に普通の日誌に附録せるもの外に、兒童の生誕日時表、同生誕所名表、同命名表、父母肖像挿入表、同略歴表、同生亡日時表、同婚

娣日時表、系統一覽表を始め、其他父母血族に關して必要なる一切の諸表を悉く網羅して居る。夫から、育兒日誌は、出生後六ヶ年、即ち小學校に入學するまでの間の日誌を記入する様に出來て居て、日々の欄は、天氣寒暖の他に、養育方法と精神發達とに分けて、尙體量、記入欄を設けて居る。尙全體に於て十二ヶ所に兒童の寫眞を挿む所が出來て居て、さて、終には、出生後、子供の費用に關する一切の支出一覽表が附いて居る。夫から、日記記入の方法に付いては、瀬川博士の指示せられた所は、まことに懇切なものである。紙數凡そ千三百餘頁、さて、内容外觀は大體右の様で、自分の考に依れば、殆んど遺憾がないといつてよい。

そこで、自分は此の如き書物の必要を一言紹介したいと思ふ。西洋では、元來子供の生育日誌などいふものは種々出來て居て、盛んに使用せられて居るが、我國では、實に本書が其先驅をなしたものだと思ふ。實に編者の言の如く、生誕の日から、子供の養育に親がどれ程苦心し、どれ程愛護したかを、生長の後に至りて、子供に事實的に知らせる事は、此日誌によりて始めて全くすることが出來て、從つて子供の親の高恩のどれ程大なるものかを知らせることが出來る。且つ又一般の婦人に取つては、自分の子を養育して行く上に、其養育の日誌を作つて、之を保育の參考にする事は最も必要なことであつて、之に依りて、一層子供の教育に注意する様になる。教育家は又た之で以て、實際兒童研究の材料が得られる譯のものである。從來とても子供の養育に注意せられる人は、各自に日誌を作つて居られるが、自分の知つて居る範圍内で

は、兎角永續しない様であるが、本書を控へて置けば、確に途切らせる心配はない、兎に角凡べての家庭には是非勧めたい。又出産祝などに、本書を進物とするが如きは、極めて嶄新なる方法だと思ふ。尙就學後の兒童日誌として本書の後編が出來る筈だし。又前編に關係なき就學後の日誌も出來るとの事である。(定價最上製四圓、上製三圓五十錢、並製二圓五十錢、發行所 東京芝區櫻川町 明翠書院)

The world is full  
of books

世界は

書籍の無盡藏なり







# フレーベル會規則

## 會 告

第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス  
 第二條 本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク  
 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ヘシ

第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ齎出スヘシ  
 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルヘシ

第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ  
 一 總會 毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保育  
 參列品幼兒成績展覽會 會務ノ報告、幹事ノ選舉等ヲナス會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルヘシ

一 常會 毎年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス  
 一 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以テ組織ス但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス

一 雜誌發行 毎月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス  
 一 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク  
 會長 一人 會務ヲ總理ス  
 主幹 一人 會長ヲ補助シテ會務ヲ掌理ス  
 幹事 十人 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス  
 評議員 若干人 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス

第八條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス  
 第九條 主幹ハ會長ノ特選トス  
 第十條 幹事ハ會員ノ互選トシ其任期ヲ二ケ年トス但シ毎年半數ヲ改選スルモノトス

第十一條 評議員ハ會長ノ特選トス  
 第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルトコトアルヘシ

第十三條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

明治卅六年八月

東 基 吉

一、原稿は毎月十日までに御送附下されたく候

一、各地方幼稚園の状況、家庭教育、女子

教育の概要其他童謡等に付きて御投稿下されたく候

フレーベル會編輯部

## 謹 告

小生儀下谷區竹町一番地生駒邸内へ轉居致し候に付き本月中本誌原稿は一切同所へ御送附下されたく候

東 基 吉

原隆國著 藤岡作太郎先生校訂

# 五編今昔物語選

蝶夢作 幸田露伴先生校訂  
編 芭蕉翁繪詞傳附句集

# 袖珍名

近松作 饗庭篁村先生校訂  
編 近松淨瑠璃三種

石川雅望作關根正直先生校訂

# 六編近江縣物語

秋成作 芳賀矢一先生校訂  
編 雨月物語

# 著文庫

曲山人補 尾崎紅葉先生校訂  
編 小三娘節用

狂言記選 芳賀矢一先生校訂

# 續狂言二十番

●錢四十圓壹册六 ●錢廿册一價正編每頁百二約數紙編每册百部全  
●圓七十册百 ●圓九册十五 ●錢十六圓四册五廿 ●錢二廿圓二册二十  
●錢四金册一稅郵 ●增錢八金付一册一製上 ●錢十五

# 發兌元

東京神田 裏神保町

# 富三郎

電話本局 一〇三六番

食物と衛生とは最も密接なる關係を有す  
本書の出づる、蓋し亦時を得たるもの也。

# 横井玉子著 女史

# 家庭料理法

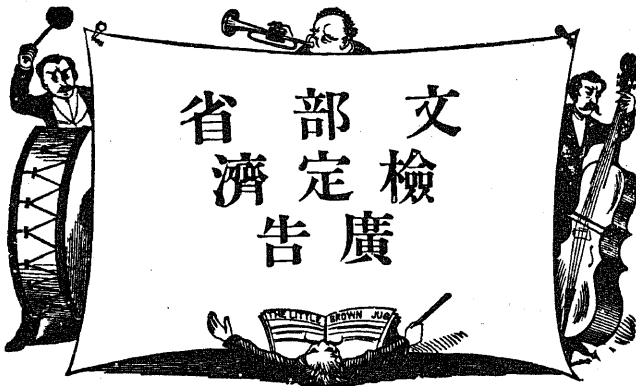
兩書共大好評再版  
全一册定價金三十五錢郵稅金八錢  
全一册上製六十五錢郵稅十錢

# 衛生一門

東京鐘ヶ淵病院院長 橋本善次 郎先生著

時下炎暑に向ふ、傳染病漸く流行せんとす、衛生を重んずる者は先づ本書を讀め!!!

明治三十四年二月廿八日第三種郵便物認可



# 唱歌教科書

空前の唱歌良教科書！  
檢定済生徒用唱歌教科書の嚆矢  
文部省檢定済

郵税一冊に就き金四錢

教師用	生徒用	全四冊
第一卷定價金三十錢	第一卷定價金十五錢	第一卷定價金十五錢
第二卷定價金三十錢	第二卷定價金十五錢	第二卷定價金十五錢
第三卷定價金三十錢	第三卷定價金十五錢	第三卷定價金十五錢
第四卷定價金三十錢	第四卷定價金十五錢	第四卷定價金十五錢
全四冊定價金一百二十錢	全四冊定價金六十錢	全四冊定價金六十錢

發行以來唯一の完全なる唱歌教科書と  
して非常なる大喝采  
を博し僅々數月間に  
三版發行の盛運に會  
したる本書は今更  
生徒用教師用共に交  
部の檢定を経て更  
らに其眞價を發揮す  
るの榮を得たり  
從來文部省檢定済  
して世に刊行せる唱  
歌集は皆悉く教師用  
即ち教師の參考書と  
して許可せられたる  
のみならず生徒用の  
ち眞の教科書として  
は實に本書が如く  
り以て本書が如く  
該科の教授上最も全  
なる良書たるかを  
るに足るべし

●洋琴 金參百圓以上 各種

●ウワイオリン 金五圓以上五拾圓迄 各種

●樂隊用樂器 船來品 八圓以上百五拾圓迄 各種

●鼓隊用樂器 大太鼓金貳拾圓以上小太鼓八圓半以上シンバル金四圓以上其他バス、バリトン、テナー、アルコーン、トロンボン等金貳拾圓以上百六拾圓迄

●手風琴 金貳圓五拾錢以上 參拾圓迄 各種

●附保險山葉風琴 定價金拾六圓五拾錢 以上金貳百圓迄

●右の外兩用風琴、吹奏琴、ハーモニカ、フラジョレット其他各樂器並に和洋音樂附屬品各種

●ピアノ、オルガン、調律修繕

●郵券貳錢 御送附目錄進呈

●(ヨキ號略信電) 番九廿百五橋新話電

●店器樂社商益共 區橋京市京東 地番三十町川竹

●

●